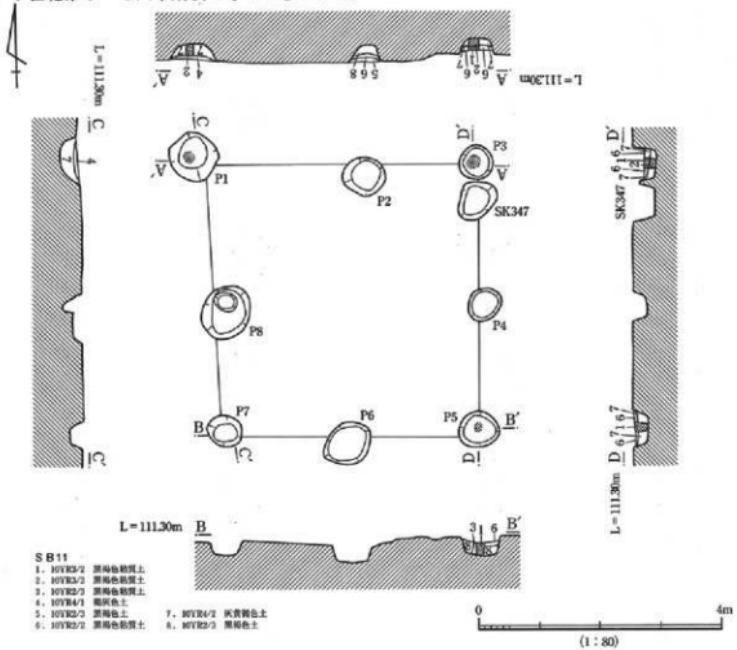


SB11 (第70図, 表4, 図版11)

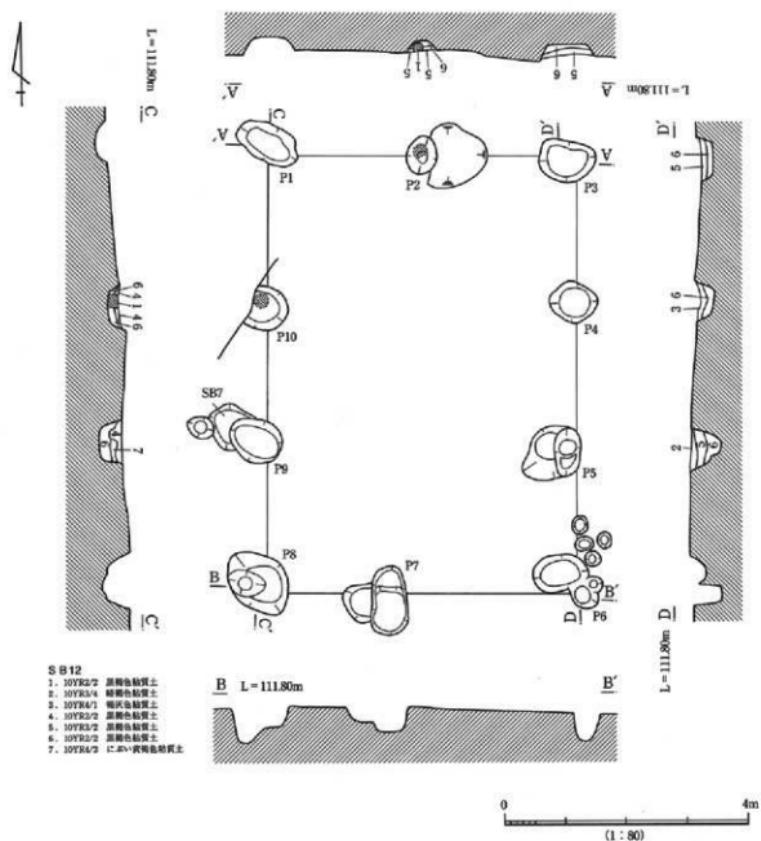
東地区 C-12～D-13グリッドに位置する。桁行4.5m (15尺)、梁行4.2m (14尺)を測る。 2×2 間の側柱式南北棟建物で、棟方向はN-2°-Eを示す。柱間距離は桁間2.1m (7尺)～2.4m (8尺)、梁間1.8m (6尺)～2.4m (8尺)である。柱痕径は18～23cmである。柱掘形はほぼ円形及び梢円形を呈する。規模は長軸57～88cm、短軸49～78cm、残存深度は23～39cmを測る。P3がやや北西方向にずれる。遺物は、P1覆土中から178の赤焼土器坏が出土している。9世紀第3～4四半期頃のものと思われる。



第70図 SB11

SB12 (第71図, 表4, 図版13)

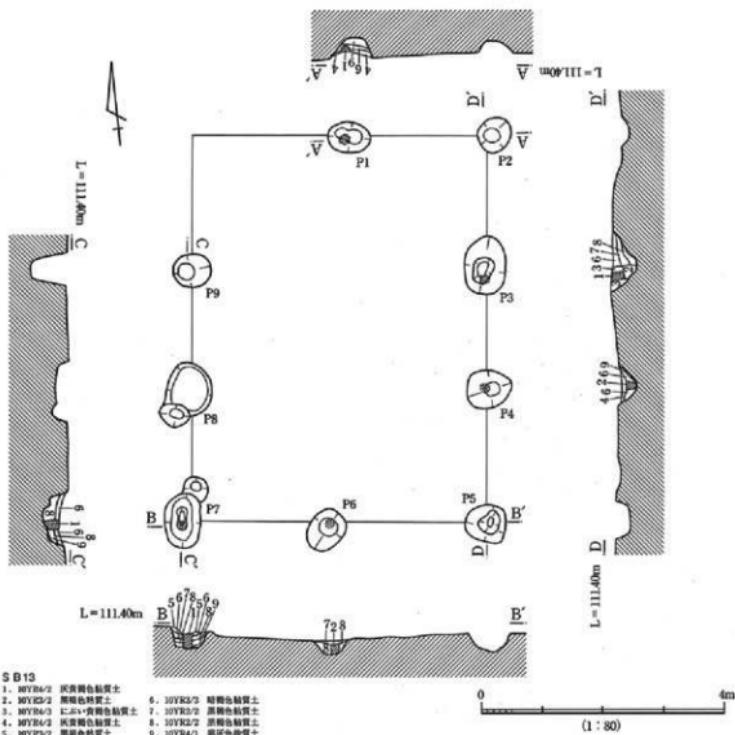
東地区 E-15～F-15グリッドに位置する。桁行7.2m (24尺)、梁行5.1m (17尺)を測る。 3×2 間の側柱式南北棟建物で、棟方向はN-1°-Eを示す。柱間距離は桁間2.4m (8尺)、梁間2.1m (7尺)～3.0m (10尺)である。柱痕径は24～32cmである。柱掘形はほぼ円形及び梢円形を呈する。規模は長軸65～120cm、短軸44～86cm、残存深度17～55cmを測る。遺物は、P3の覆土中から179の特殊器形の須恵器が出土している。久保手2号窯出土坏に類似しており、9世紀第1四半期頃のものと思われる。P6の覆土中からは180の土師器坏、181・182の赤焼土器坏、183の土師器壺が出土している。



第71図 SB 12

SB 13 (第72図、表4、図版13)

東地区D-14～E-15グリッドに位置する。桁行6.3m(21尺)、梁行4.8m(16尺)を測る。
 3×2間の側柱式南北棟建物で、棟方向はN-4°-Eを示す。柱間距離は桁間2.1m(7尺)、
 梁間2.4m(8尺)である。柱痕径は15～17cmである。柱掘形はほぼ円形及び梢円形を呈する。
 規模は長軸58～98cm、短軸50～67cm、残存深度20～46cmを測る。遺物は、P 8 の覆土中から184
 件の須恵器坏が出土している。二子沢E段階の須恵器坏に類似しており、9世紀第3～4四半期
 頃のものと思われる。



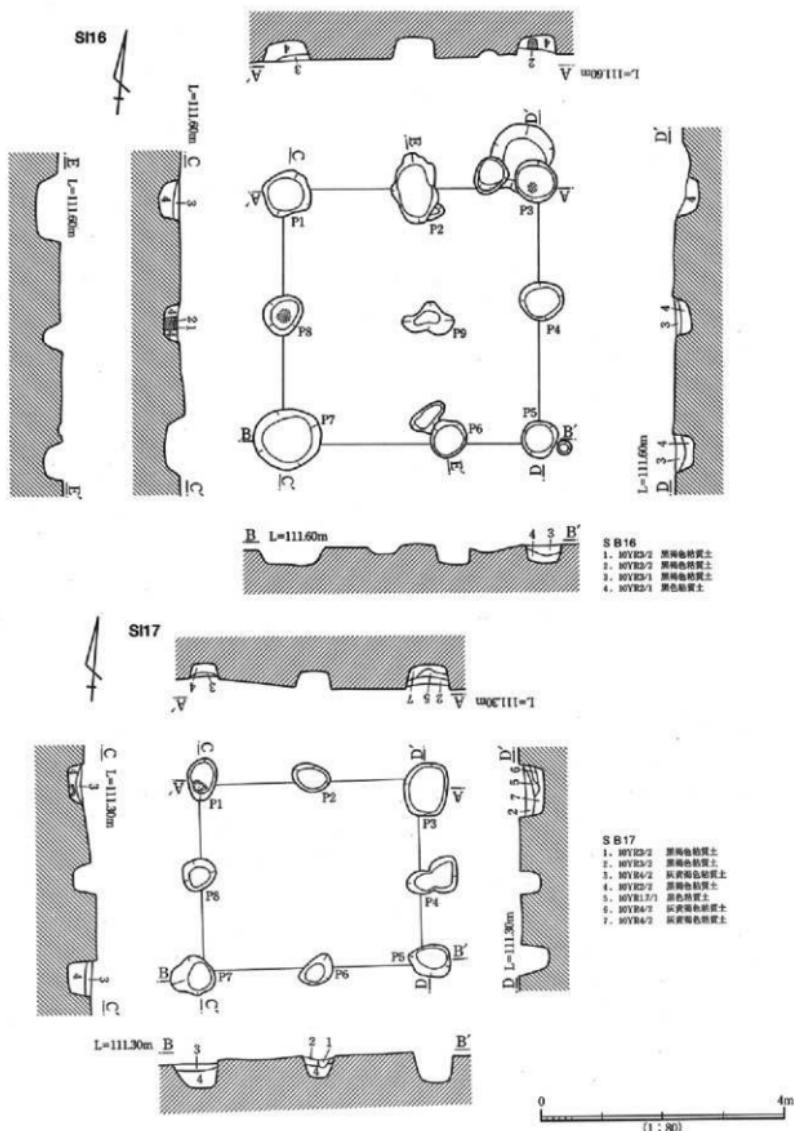
第72図 SB 13

SB 16 (第73図, 表4, 図版13)

東地区E-16・17グリッドに位置する。桁行4.2m(14尺)、梁行4.2m(14尺)を測る。2×2間の側柱式南北棟建物で、棟方向はN-5°-Wを示す。柱間距離は桁間2.1m(7尺)、梁間1.5m(5尺)および2.7m(9尺)である。柱直径は15~21cmである。柱掘形はほぼ円形及び梢円形を呈する。規模は長軸62~115cm、短軸58~100cm、残存深度30~39cmを測る。

SB 17 (第73図, 表4, 図版13)

東地区D-13グリッドに位置する。桁行3.6m(12尺)、梁行3.0m(10尺)を測る。2×2間の側柱式南北棟建物で、棟方向はN-6°-Wを示す。柱間距離は桁間1.8m(6尺)、梁間1.5m(5尺)である。柱直径は約16cmである。柱掘形はほぼ円形及び梢円形を呈する。規模は長軸51~86cm、短軸37~73cm、残存深度26~44cmを測る。

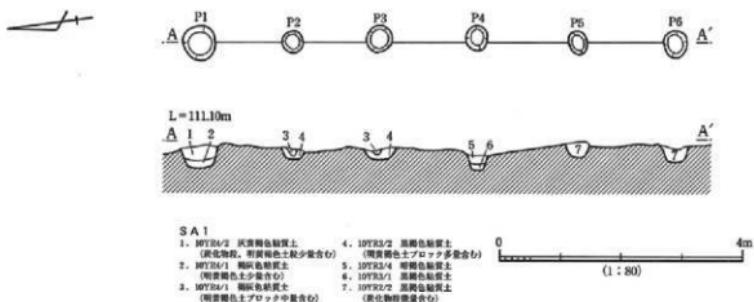


第73図 SB16・SB17

3 桁列

S A 1 (第74図, 表5)

西地区 D - 11 ~ E - 10 グリッドにかけて位置する。6基のピットから構成される。全長7.80m (26尺)、柱間距離はP4 - P5 間が1.8m (6尺) で、その他は1.5m (5尺) である。列の方向はN - 8° - E を示す。柱掘形及び規模は、P1 ~ 4・6 は円形を呈し、長軸35~56cm、短軸35~54cm、残存深度18~37cmを測る。P5 のみは梢円形を呈し、長軸38cm、短軸30cm、残存深度26cmを測る。



第74図 S A 1

4 土坑

S K 2 (第77図, 表6, 図版13)

西地区 D - 5 グリッドに位置する。規模は長軸111cm、短軸89cm、残存深度35cmを測り、平面形は梢円形を呈する。覆土中全体に遺物が含まれており、遺物廃棄土坑と考えられる。遺物は、185・186の須恵器広口瓶、187の須恵器壺、188・190の須恵器甕が出土している。

S K 3 (第77図, 表6, 図版13)

西地区 D - 5 グリッドに位置する。規模は長軸83cm、短軸78cm、残存深度26cmを測り、平面形は梢円形を呈する。遺物は、覆土中から191の赤焼土器坏が出土している。

S K 11 (第77図, 表6)

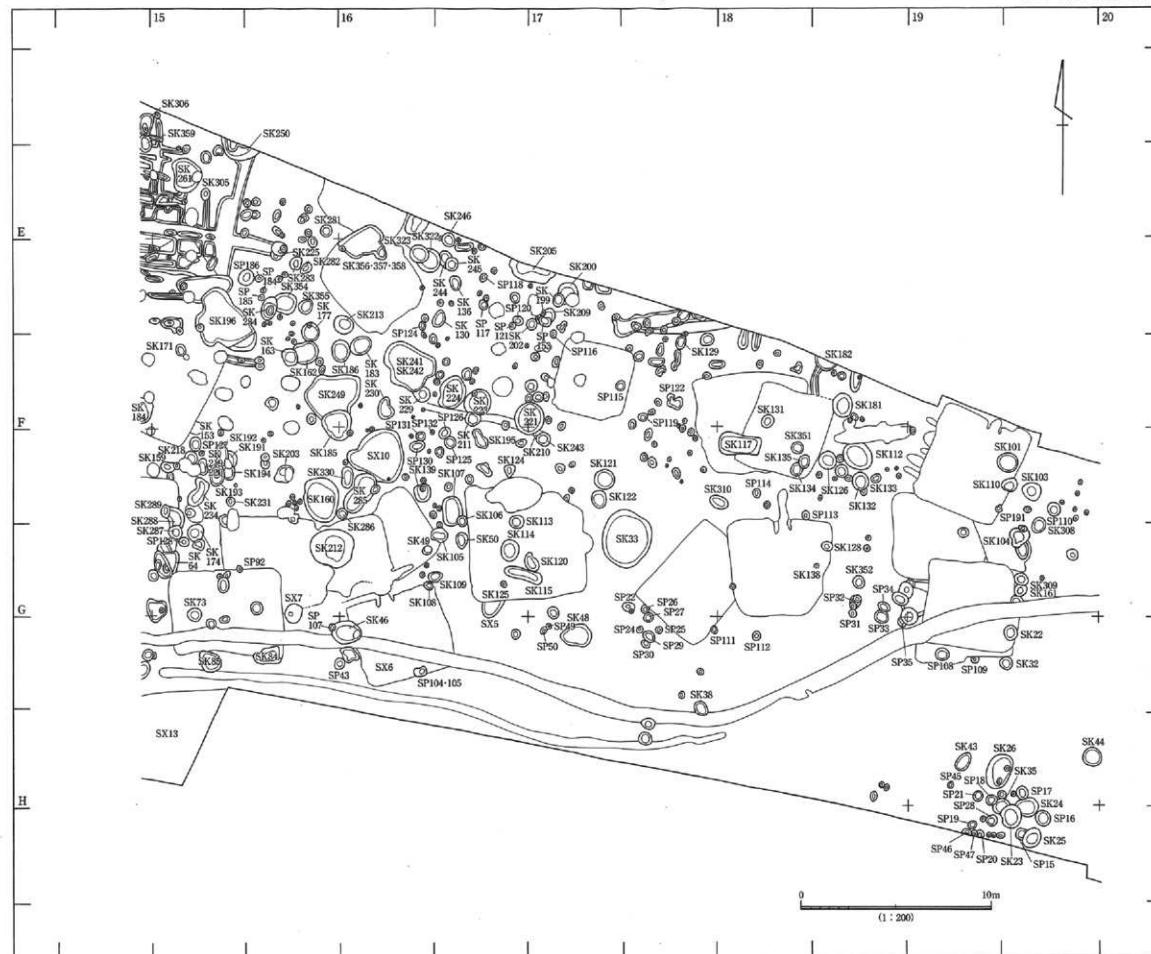
西地区 D - 10 グリッドに位置する。規模は長軸220cm、短軸184cm、残存深度20cmを測り、平面形は梢円形を呈する。遺物は、覆土中から192の土器坏が出土している。

S K 13 (第78図, 表6)

西地区 E - 9 グリッドに位置する。規模は長軸70cm、短軸62cm、残存深度12cmを測り、平面形は円形を呈する。遺物は、覆土中から193の須恵器蓋が出土している。



第75図 土坑・ピット(1)



第76図 土坑・ピット(2)

S K14 (第78図, 表6)

西地区C-6グリッドに位置する。規模は長軸254cm、短軸246cm、残存深度22cmを測り、平面形は円形を呈する。遺物は、覆土中から10世紀前半代の195の須恵器坏、196の赤焼土器坏が出土している。

S K17 (第78図, 表6)

西地区C-10グリッドに位置する。規模は長軸67cm、短軸65cm、残存深度26cmを測り、平面形は円形を呈する。遺物は、覆土中から197の土師器高台付坏が出土している。

S K20 (第78図, 表6)

西地区D-10グリッドに位置する。規模は長軸62cm、短軸48cm、残存深度24cmを測り、平面形は楕円形を呈する。遺物は、覆土中から198の土師器壺が出土している。

S K28 (第78図, 表6)

西地区F-9グリッドに位置する。規模は長軸98cm、短軸92cm、残存深度15cmを測り、平面形は円形を呈する。遺物は、覆土中から199・200の赤焼土器と、201・202の土師器壺が出土している。

S K29 (第78図, 表6)

西地区F-9グリッドに位置する。規模は長軸115cm、短軸112cm、残存深度27cmを測り、平面形は円形を呈する。遺物は、覆土中から203の赤焼土器坏が出土している。

S K31 (第78図, 表6)

東地区G-20グリッドに位置する。規模は長軸229cm、短軸132cm、残存深度11cmを測り、平面形は不整椭円形を呈する。遺物は、覆土中から204のやや高めの高台がついた内外面黒色処理の土師器耳皿が出土している。

S K46 (第78図, 表6)

東地区G-16グリッドに位置する。規模は長軸163cm、短軸122cm、残存深度21cmを測り、平面形は楕円形を呈する。遺物は、覆土中から205の内外面黒色処理の土師器高台付坏が出土している。

S K64 (第78図, 表6)

東地区F-15グリッドに位置する。規模は長軸128cm、短軸127cm、残存深度29cmを測り、平面形は不整方形を呈する。遺物は、覆土中から200の内外面黒色処理の土師器高台付坏が出土している。

S K110 (第79図, 表6)

東地区F-19グリッドに位置する。規模は長軸75cm、短軸62cm、残存深度16cmを測り、平面形は楕円形を呈する。遺物は、覆土中から207の9世紀第2四半期頃の須恵器双耳坏が出土している。

S K160 (第79図, 表7, 図版13)

東地区F-15グリッドに位置する。規模は長軸227cm、短軸180cm、残存深度52cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。遺物は、覆土中から208の須恵器坏が出土している。坏内には漆が遺存しており、その表面には「附章 第1節」の中で詳しく解説している漆紙文書が付着していた。覆土中全体に遺物が包含されており、遺物廃棄土坑と考えられる。

SK185 (第79図、表7)

東地区E-15グリッドに位置する。規模は長軸164cm、短軸158cm、残存深度19cmを測り、平面形は不整円形を呈する。遺物は、覆土中から209の赤焼土器坏が出土している。

SK196 (第79図、表7)

東地区E-15グリッドに位置する。規模は長軸383cm、短軸250cm、残存深度28cmを測り、平面形は不整椭円形を呈する。遺物は、覆土中から210・211の須恵器坏、212の高台付坏、216の壺、27の甕、213~215の赤焼土器坏が出土している。10世紀前半代のものと思われる。

SK256 (第79図、表7)

東地区D-11グリッドに位置する。規模は長軸507cm、短軸182cm、残存深度15cmを測り、平面形は椭円形を呈する。遺物は、覆土中から218の8世紀後半頃の須恵器坏が出土している。

SK260 (第79図、表7)

東地区D-13グリッドに位置する。規模は長軸232cm、短軸198cm、残存深度25cmを測り、平面形は椭円形を呈する。遺物は、覆土中から219の須恵器坏が出土している。

SK288 (第80図、表8)

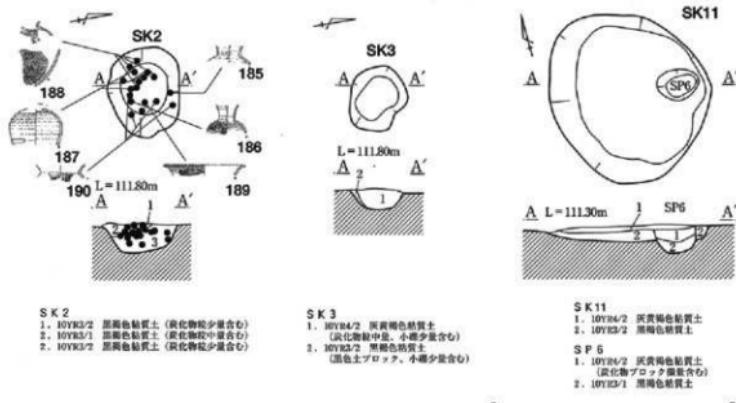
東地区F-15グリッドに位置する。規模は長軸113cm、短軸90cm、残存深度13cmを測り、平面形は不整椭円形を呈する。遺物は、覆土中から220の9世紀第3~4四半期頃の須恵器坏や、221の赤焼土器が出土している。

SK295 (第80図、表8)

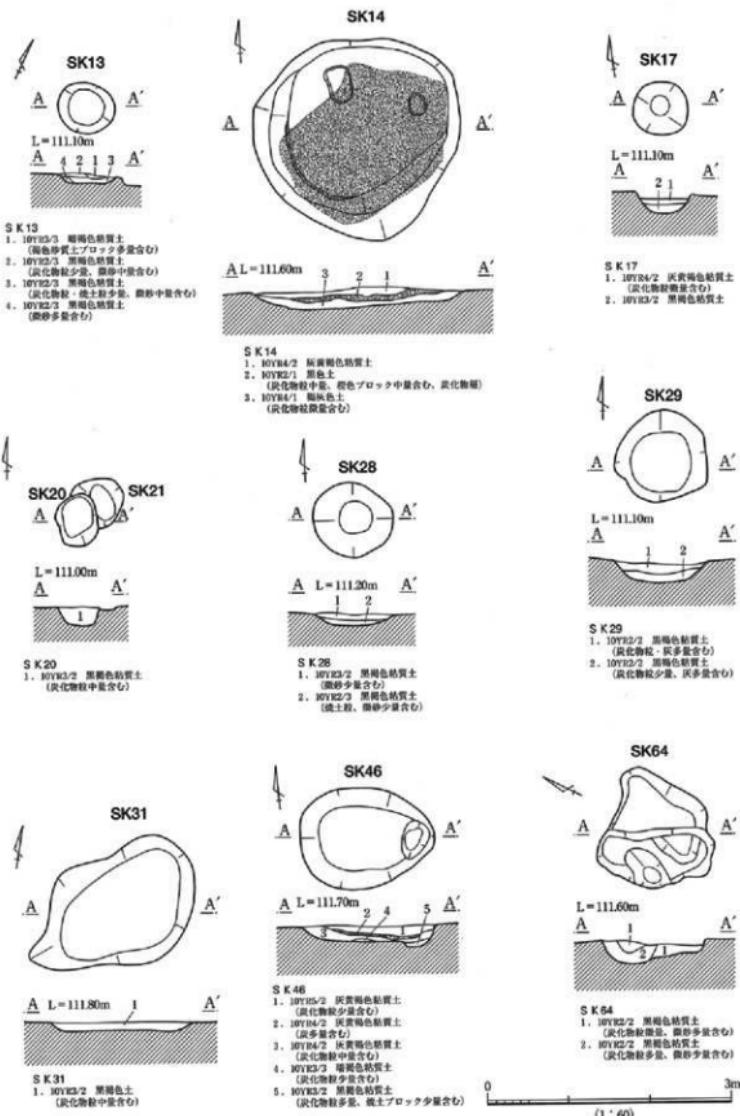
東地区D-12グリッドに位置する。規模は長軸227cm、短軸152cm、残存深度28cmを測り、平面形は椭円形を呈する。遺物は、覆土中から222の8世紀後半頃の須恵器蓋が出土している。

SK355 (第80図、表8)

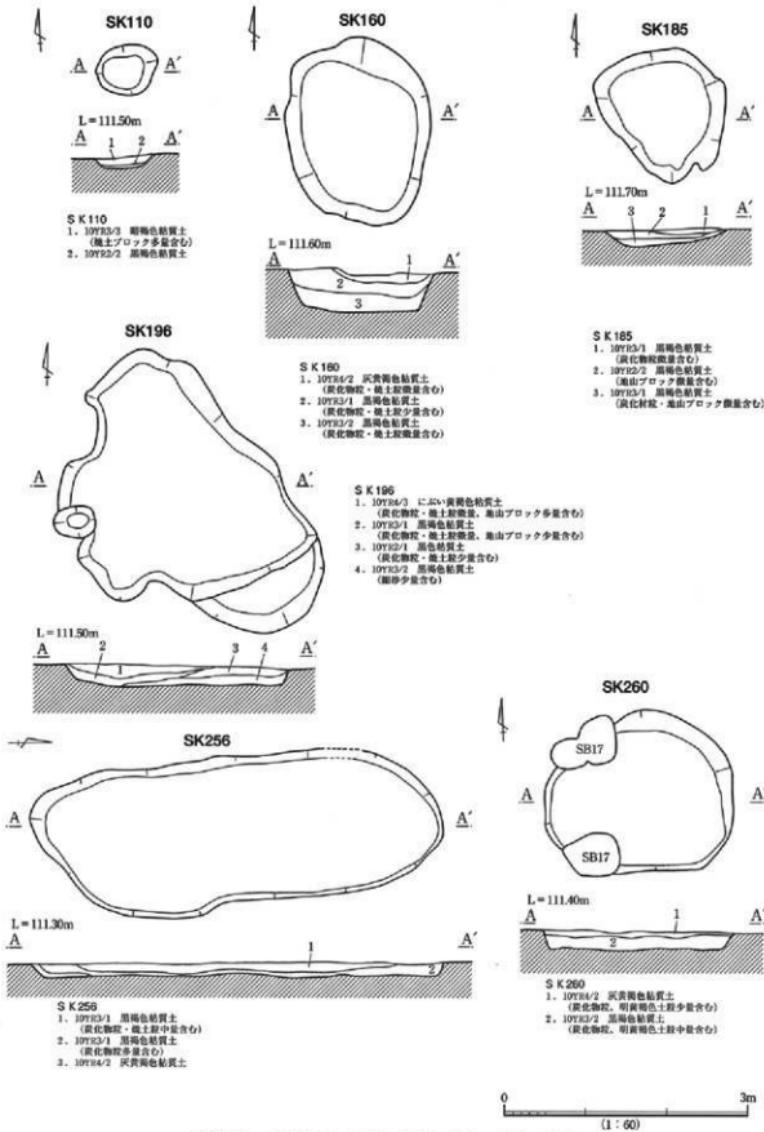
東地区E-15グリッドに位置する。規模は長軸82cm、短軸68cm、残存深度14cmを測り、平面



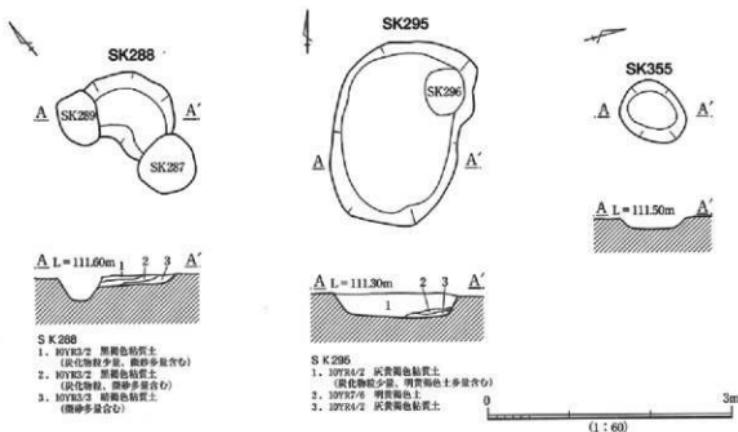
第77図 SK 2・3・11 0 3m
(1:60)



第78図 SK 13・14・17・20・28・29・31・46・64



第79図 S K 110・160・185・196・256・260



第80図 S K 288・295・355

形は梢円形を呈する。遺物は、覆土中から233の灰釉陶器長頭瓶が出土している。9世紀代のものと思われる。

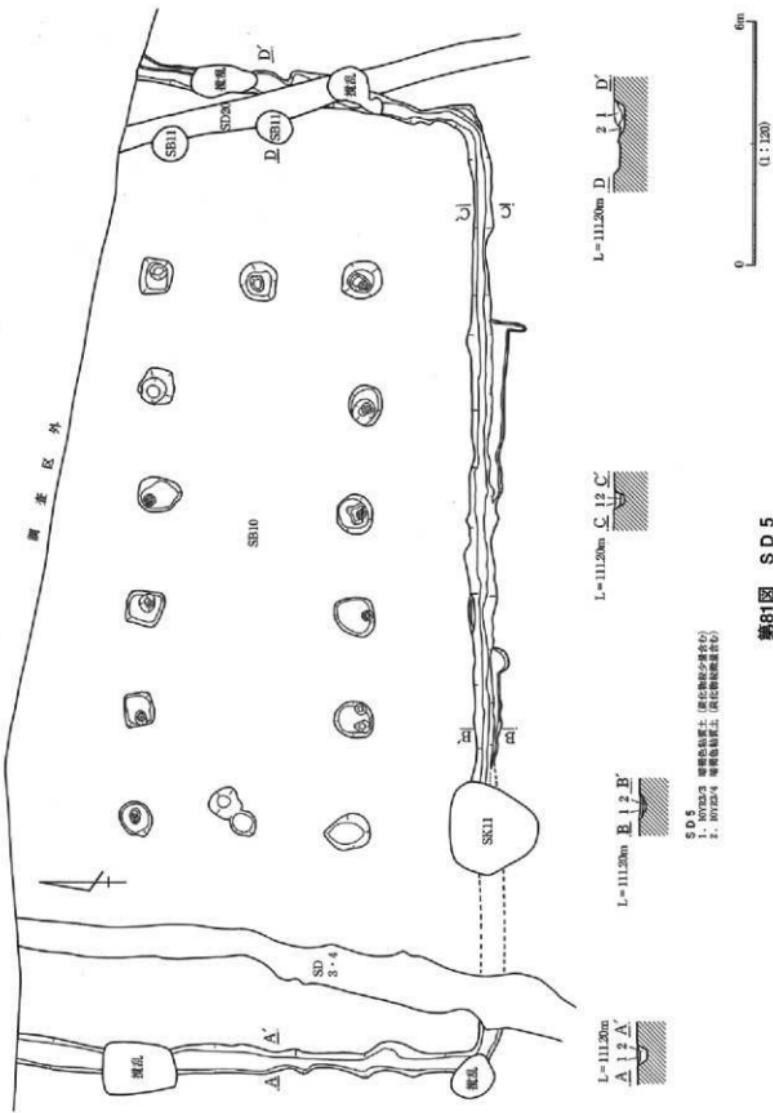
5 溝跡

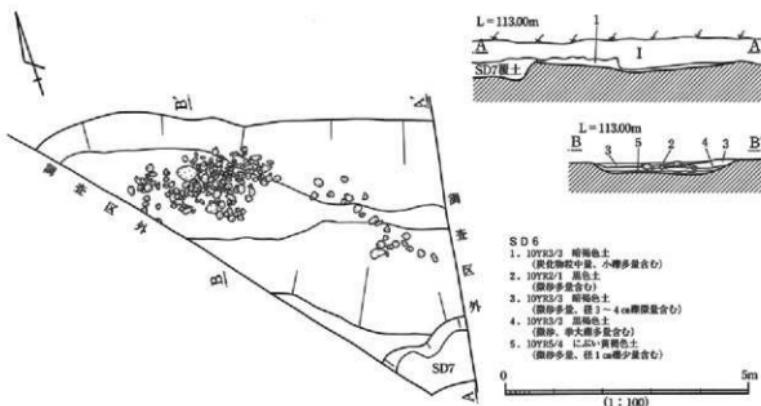
S D 5 (第81図, 表9, 図版12)

西地区C-10~東地区D-12グリッドにかけて位置する。東西方向に直線的に延び、両端が北方向へほぼ直角に曲がる溝跡である。北側は調査区外へ延びるため不明であるが、おそらく南側と同じように曲がり、一定の空間を長方形に区画する溝跡であると考えられる。西側をS D 3・4、SK11に、東側をSD20、SB11に切られる。規模は、上端幅0.35~0.75m、下端幅0.15~0.52m、長さ東西23.8m、南北11.6m以上、残存深度14~30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。覆土は暗褐色粘土質の層が2層に分かれ、炭化物質を上層は少量、下層は微量含む。SB10がこの溝跡の中央に収まるため、この建物の区画を目的としていた可能性もある。遺物は、228の須恵器高台付坏が南西コーナー部付近の覆土上層から、224の須恵器坏が南東部の覆土中層から出土している。その他に226の須恵器広口瓶、227の刀子等が出土している。時期は9世紀第2~3四半期頃のものである。

S D 6 (第82図, 表9, 図版13)

東地区I-26~J-26グリッドにかけて位置する。東西方向に直線的に延びる溝跡で、両端が調査区外へと延びる。南東端をSD7に切られる。規模は、上端幅3.52~4.40m、下端幅0.40~1.85m、長さ8.30m以上、残存深度20~30cmを測る。断面形態は皿状を呈する。底面の標高を比較すると、両端に比べ中央が深くなる。覆土は、上層では炭化物や小砂砾を含み、下層では径1cm~拳大の砾を多量に含み、特に中央付近に拳大の砾の堆積が認められる。





第82図 SD6

6 敵状遺構

1号敵状遺構（第83図）

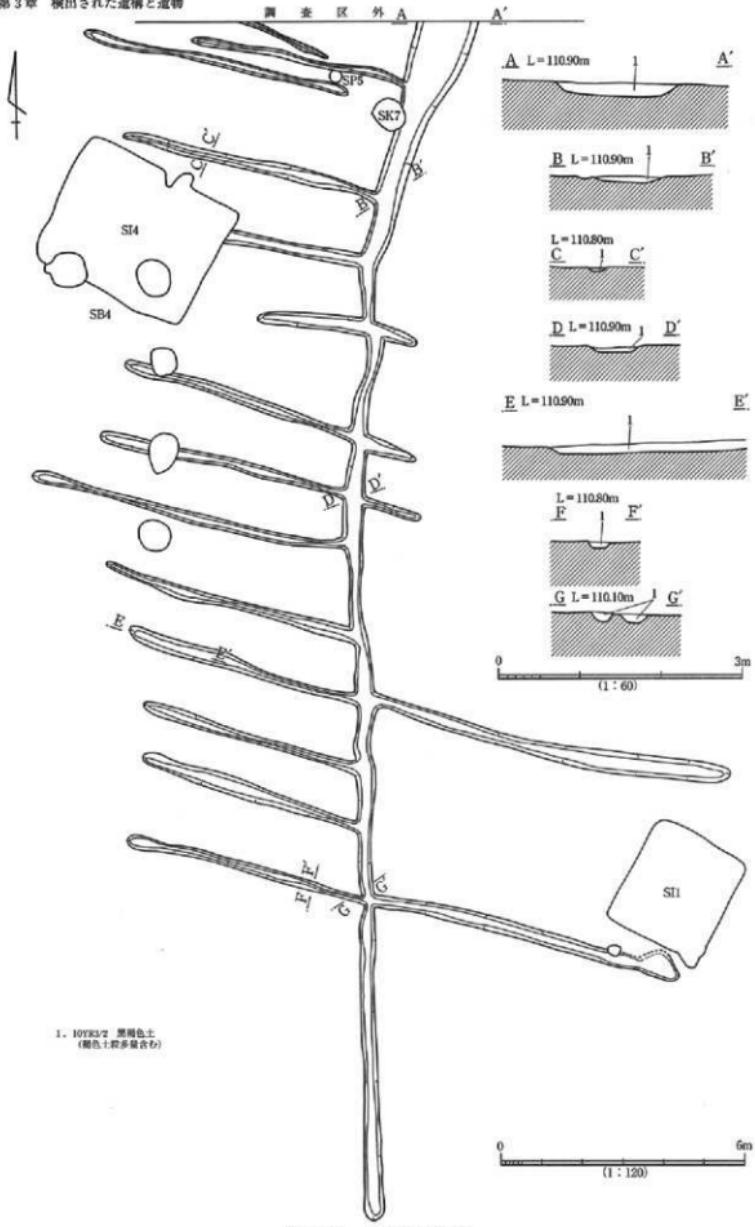
西地区C-8～F-9グリッドにかけて位置する。北方向は調査区外へ延びている。古墳時代のS I 4を切る。規模は南北方向が29.80m以上、東西方向が約17.30mである。敵山は削平を受け、敵立に掘られた小溝が13条検出された。小溝の規模は幅18～58cm、残存深度8～12cm、敵合196～217cm、北側の狭い部分は18～38cmである。断面形は皿状を呈する。方向はN-76°-Wを示し、ほぼ並行して構築されている。覆土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は、覆土中から9世紀後半の須恵器坏、土師器甕口縁部等の破片が出土している。

2号敵状遺構（第84図）

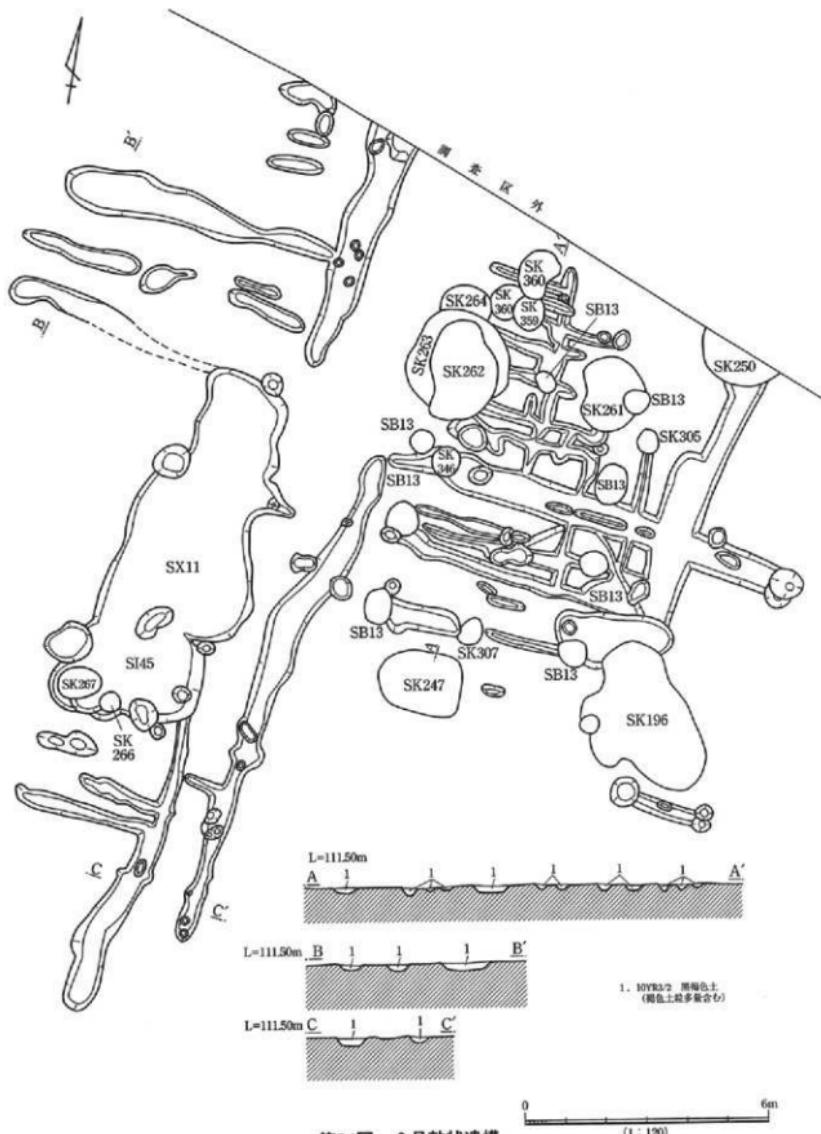
東地区D-13～F-14グリッドにかけて位置する。北方向は調査区外へ延びている。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑等、多くの遺構に切られる。規模は南北方向23.0m以上、東西方向が21.0mである。全体にかなり削平を受けており、敵立に掘られた小溝の内15条が確認された。小溝の規模は幅8～27cm、残存深度16～20cmで、敵合6～20cmである。断面形は皿状を呈する。方向はN-82°-Wを示し、ほぼ並行して構築されている。覆土は黒褐色粘質土の単層である。

7 遺構外出土遺物

C-3グリッドからは241の須恵器風字硯が出土している。D-2グリッドからは242の先端に溶融萍の付着した羽口片が出土している。表探遺物では239の灰釉陶器碗片が出土している。



第83図 1号窓状遺構



第84図 2号畝状造構

8 出土遺物（第85～95図、表15～17、図版20～26）

土器は須恵器と土師器、赤焼土器、灰釉陶器が出土している。須恵器は壺・高台付壺・甕・壺・広口瓶・風字硯、土師器は壺・高台付壺・甕・赤焼土器は壺・碗・皿・甕、灰釉陶器は碗と長頸瓶である。赤焼土器は供膳器種以外についても赤焼土器とする呼び方が通例のようそれに従っている。黒色土器については、土師器の内面黒色処理、あるいは内外面黒色処理として土師器の中に含めて記述している。

須恵器は、8世紀～9世紀代を中心にして10世紀初頭までの時期に供膳具を主体として出土している。8世紀代の須恵器壺はS I 15・S I 17・S K 256・S K 260から、甕はS I 15から出土している。いずれの須恵器の壺も底径が大きく、回転切り離し後ナデ調整のものである。9世紀前半代のものはS I 51のピット覆土から出土している壺、S I 10の壺、S I 30・S K 295の甕が挙げられる。S I 51のピット覆土のものは器高が低く底径が大きい器形で、底部は静止糸切りで体部下端に手持ちヘラ削りを施す。久保手山1号窯跡のものに体部下端の手持ちヘラ削りがあり、9世紀初頭頃の時期のものかと思われる。S I 10の須恵器壺は底部回転ヘラ切り後押さえが入り、9世紀第2四半期とされる小松原1号窯段階頃のものと思われる。甕はS I 30・S K 13・S K 295から出土しているものが9世紀前半代のものと思われる。9世紀前半代で特殊な器形のものとしては、S K 110の双耳壺、S B 12の壺が挙げられる。S B 12の壺は久保手2号窯に類似形のものがある。9世紀後半の壺は器高が低く底部径が小さく、底部の切り離しはすべて回転糸切りである。S I 16・19・29・37出土のものが二子沢D地点1号窯や二子沢E地点1号窯の製品に類似した器形のものである。高台付壺では二子沢D地点1号窯のものに類似した深身のものがS B 9から出土している。

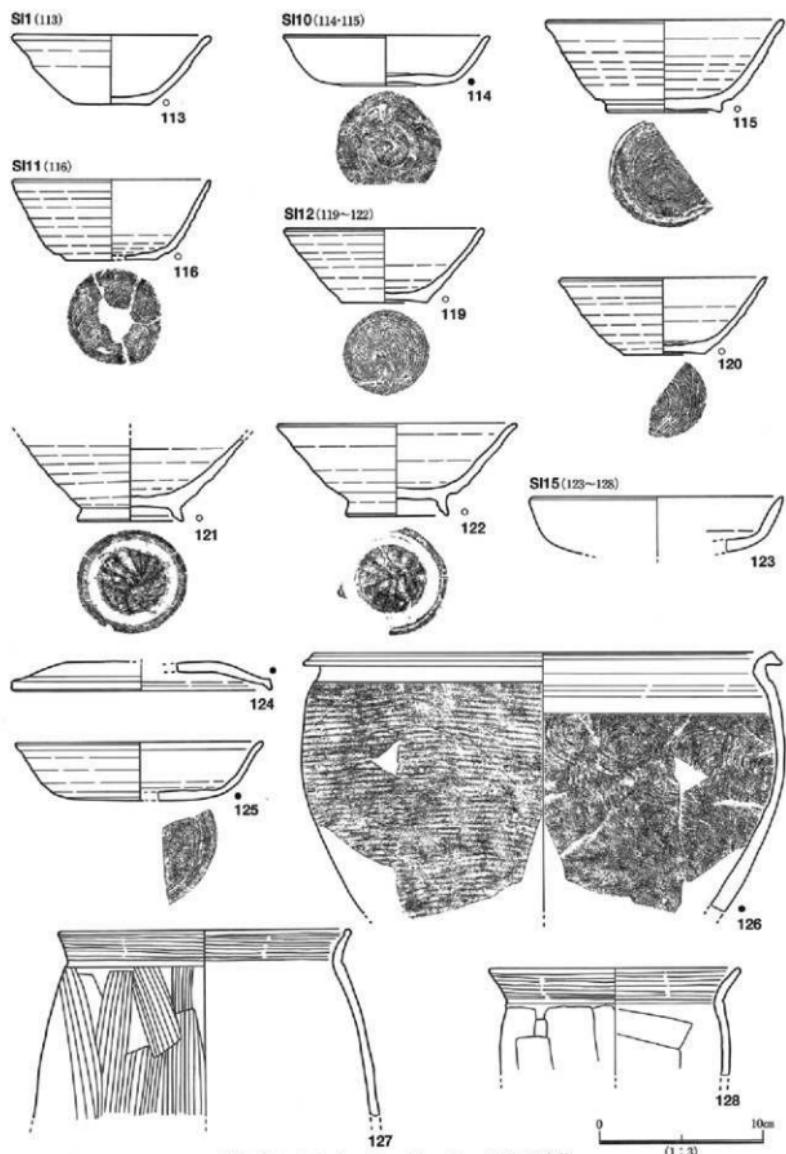
10世紀初頭の須恵器壺はS I 33・38から出土しており、器高が高い特徴を持っている。三本木窯跡出土のものに形態が類似し、焼成も甘く赤焼土器との区別がやや不分明なものである。

貯蔵具の甕・甕類はS I 15・17から8世紀代の平底の須恵器甕が出土している。9世紀後半ではS I 19とS I 37で広口瓶ないし長頸瓶の体下半部が出土している。二子沢窯跡群D地点1号窯跡出土広口瓶の高台部に類似したものがS I 19から出土している。10世紀代ではS I 38から高台の退化した小振りな長頸瓶が出土している。S K 2の広口瓶・甕はほぼ同時期の廃棄土器であろうが、広口瓶は頭部が太く10世紀代に入るものかと思われる。

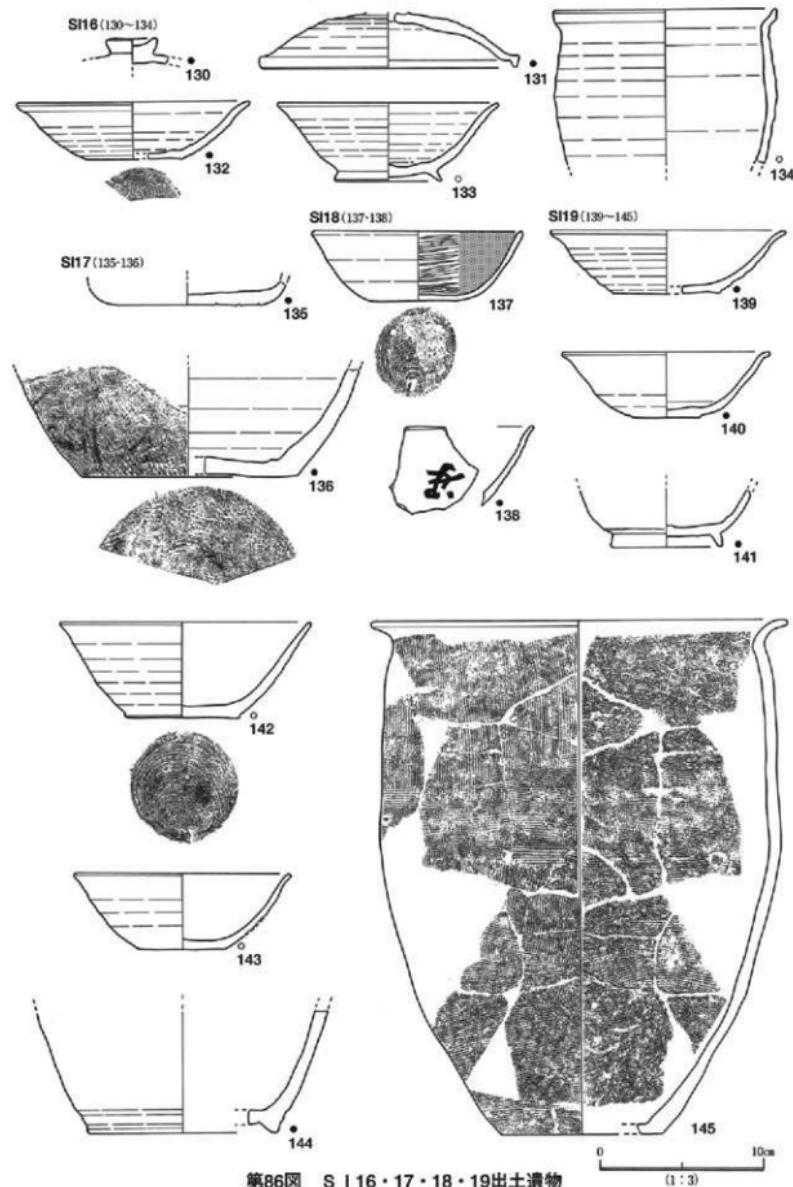
190の甕内面には蜘蛛の圧痕が残っている。蜘蛛は体長1.2cm程度で、須恵器甕の制作時の叩き段階に工人の使っていたアテ具によって押しつぶされ内面に圧痕として残ったものと思われる。イエオニグモという種類の蜘蛛（「オルビス学習科学図鑑 昆虫2」学研1980年によると「夕方から夜にかけて、家の周りに垂直の円網をはる。...網は毎日新しくつくりなおす。」）に最も類似している。体長は6～12mmで本州・四国・九州・沖縄・小笠原諸島に生息するとのことで極普通に見られる蜘蛛の種類のようである。その他にC-3グリッドから301の風字硯が出土している。体部側面に格子状の沈線を刻み、底部には細長い脚部の剥離痕が見られる。



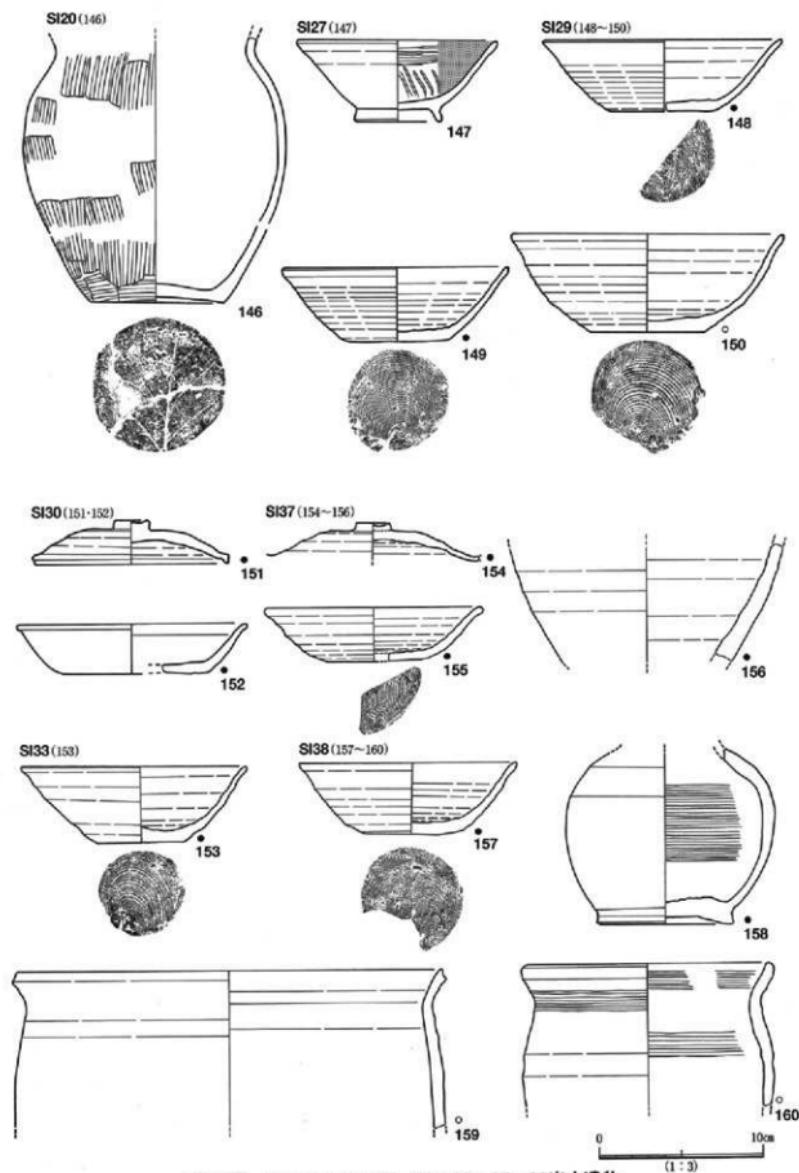
イエオニグモ



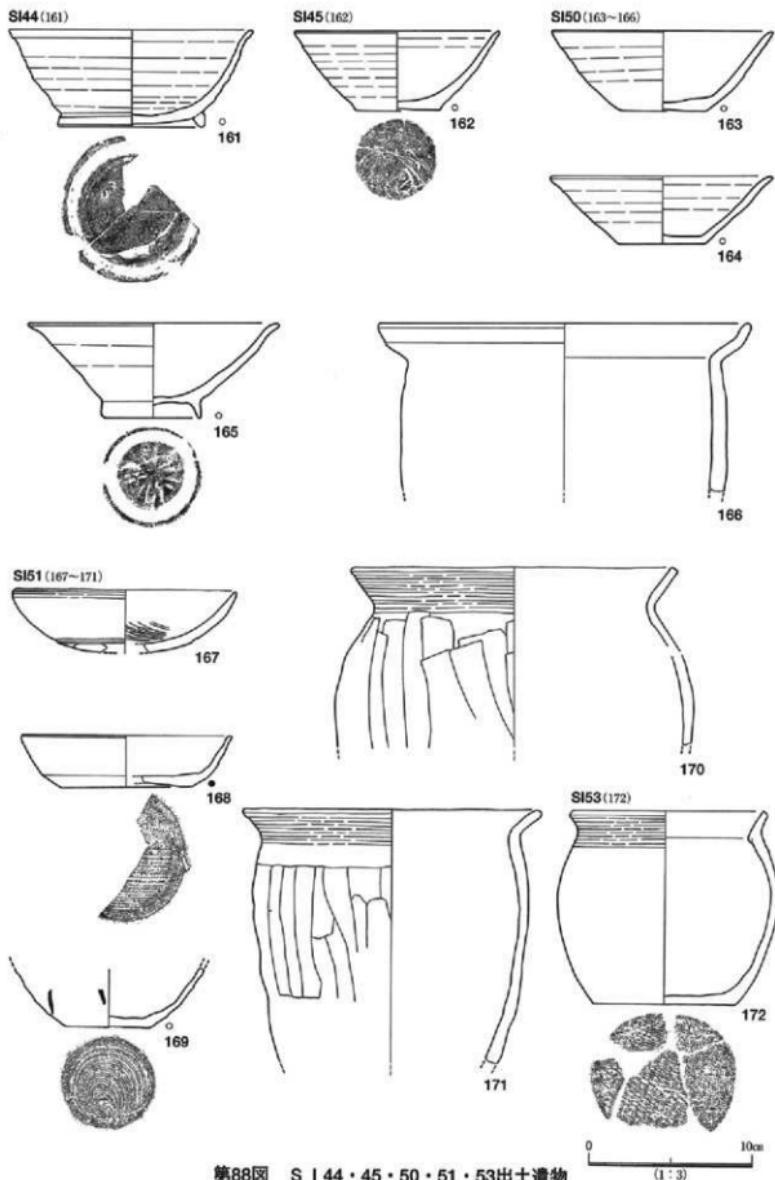
第85図 S 11・10・11・12・15出土遺物



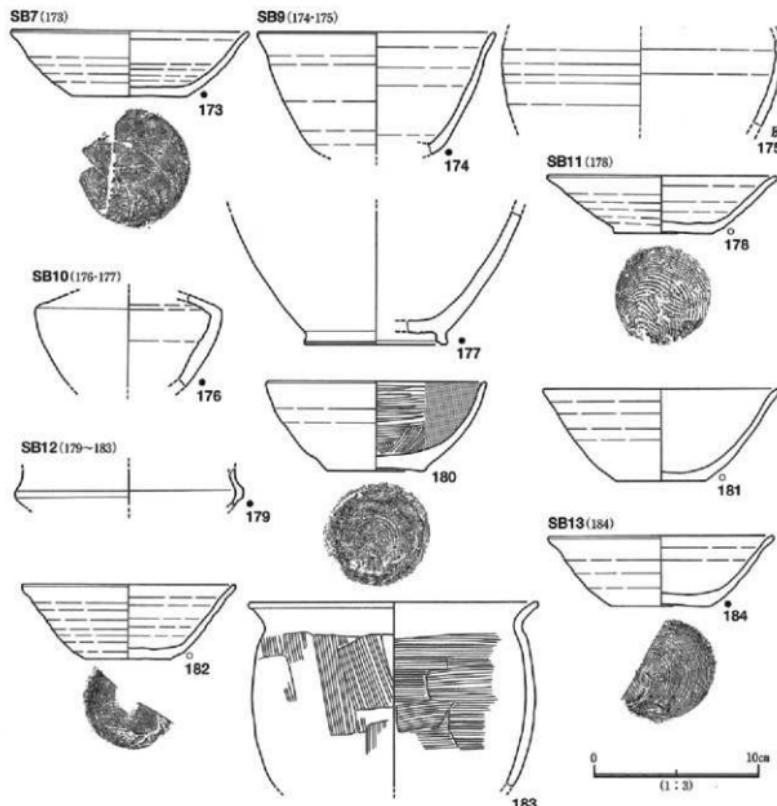
第86図 S 16・17・18・19出土遺物



第87図 S I 20・27・29・30・33・37・38出土遺物



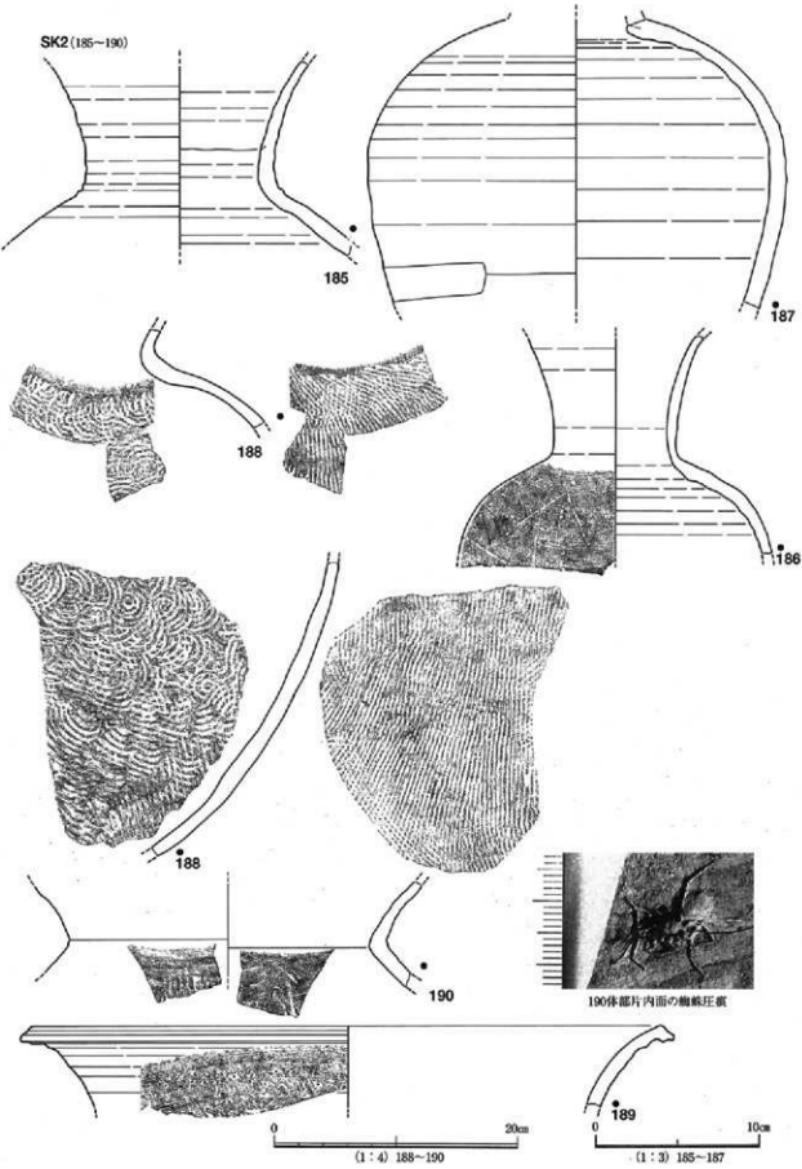
第88図 S 144・45・50・53出土遺物



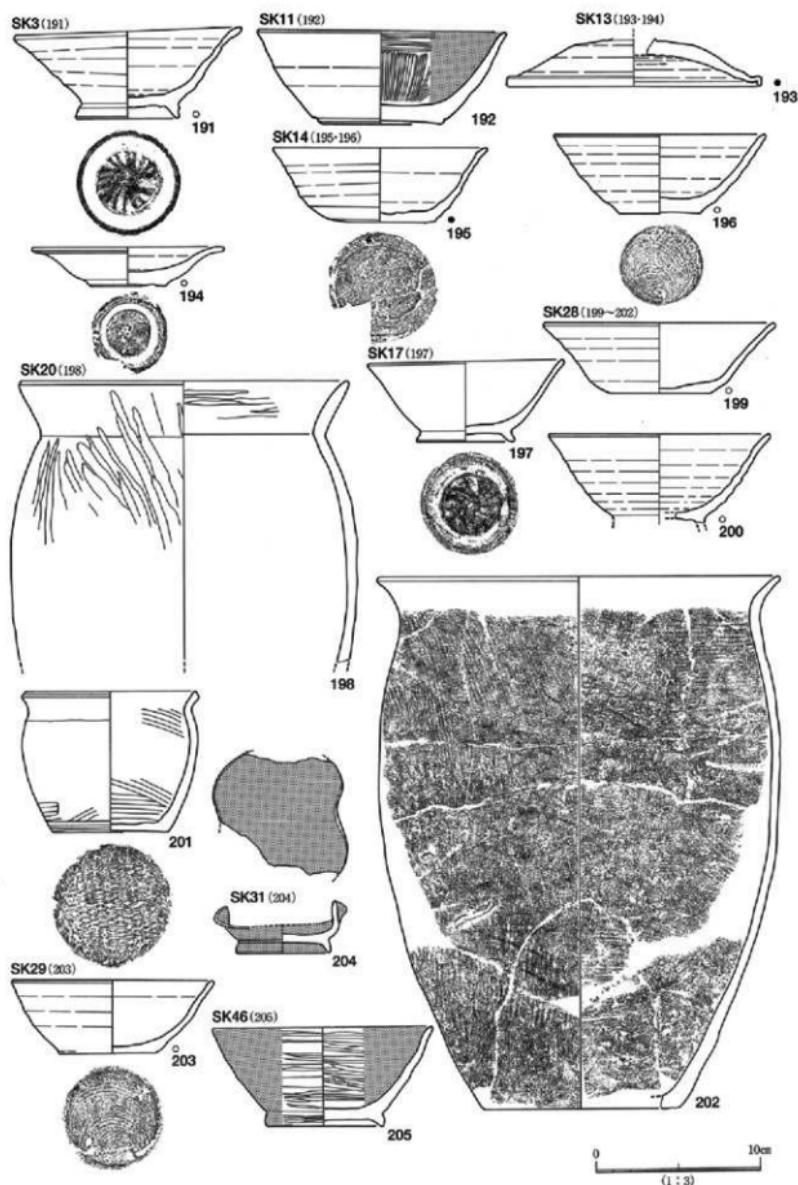
第89図 SB7・9・10・11・12・13出土遺物

土師器は、非ロクロの壺と甕がある。壺は底部にヘラ削りを施し、体部全体に丸味を持った167の壺と、123の口縁部が屈曲して短く立ち上がる壺、137・180・192の内面ヘラ磨き・黒色処理を施した壺と、147・206の高台付壺、205の内外面とも黒色処理を施した高台付壺、204の耳皿が出土している。8世紀代のものは、S I 15出土の123の壺、S I 51出土の167の壺である。9世紀前半の土師器壺の出土例は乏しく、9世紀後半からS I 18、S I 27、S B 12、S K 11で内面黒色処理の丁寧なヘラミガキのものが見られる。10世紀前半ではS K 64の高台付壺がある。内外面黒色処理の耳皿は10世紀後半と考えられる。

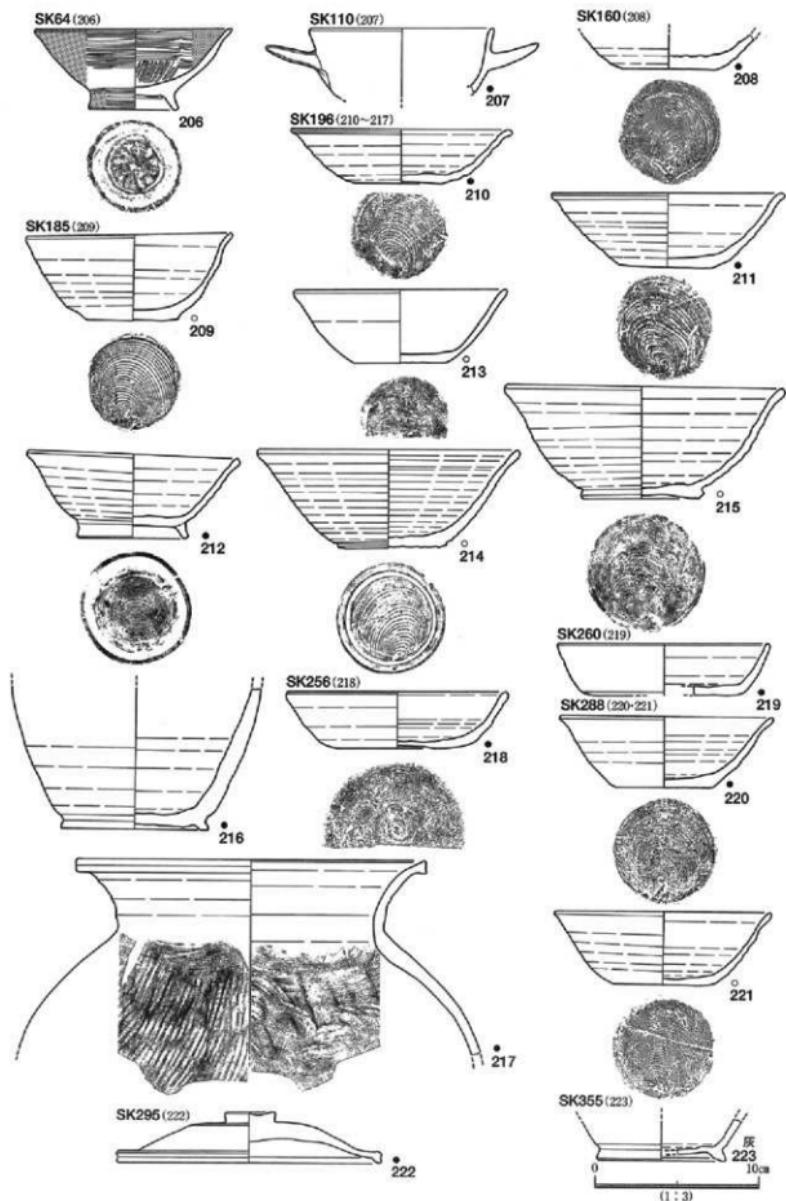
土師器甕は、8世紀前代ではS I 15の127・128と、S I 51の170・171のものがある。口縁部が体部から「く」の字状に屈曲し直線的に立ち上がる形のものである。9世紀前半代の出土例が少ないが、9世紀後半代では、S I 19の145の甕、S K 28の202の甕と201の小甕が見られる。



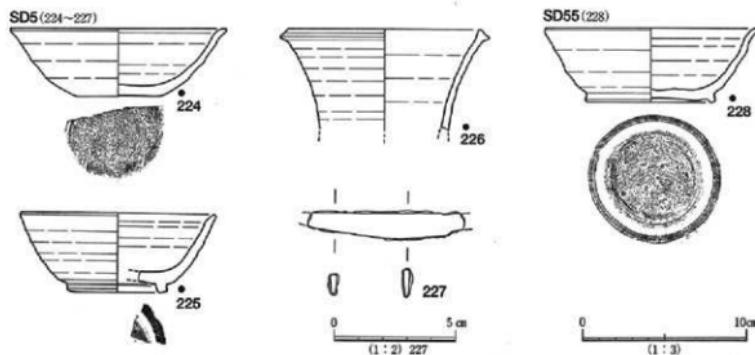
第90図 SK2出土遺物



第91図 SK3・11・13・14・17・20・28・29・31・46出土遺物



第92図 SK 64・110・160・185・196・256・260・288・295・355出土遺物



第93図 SD 5・55出土遺物

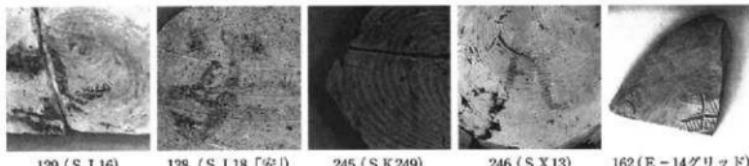
赤焼土器は、9世紀後半から10世紀初めにかけて数多く出土している。S I 10の115の壺は共伴須恵器から9世紀前半に属するものと思われる。底部が厚く底部周縁で接地する深身の器形である。壺はS I 16・38から134・160の小形壺が出土している。

灰釉陶器は、SK 355から223の長頸瓶底部片が、表採で239の灰釉陶器碗が出土している。

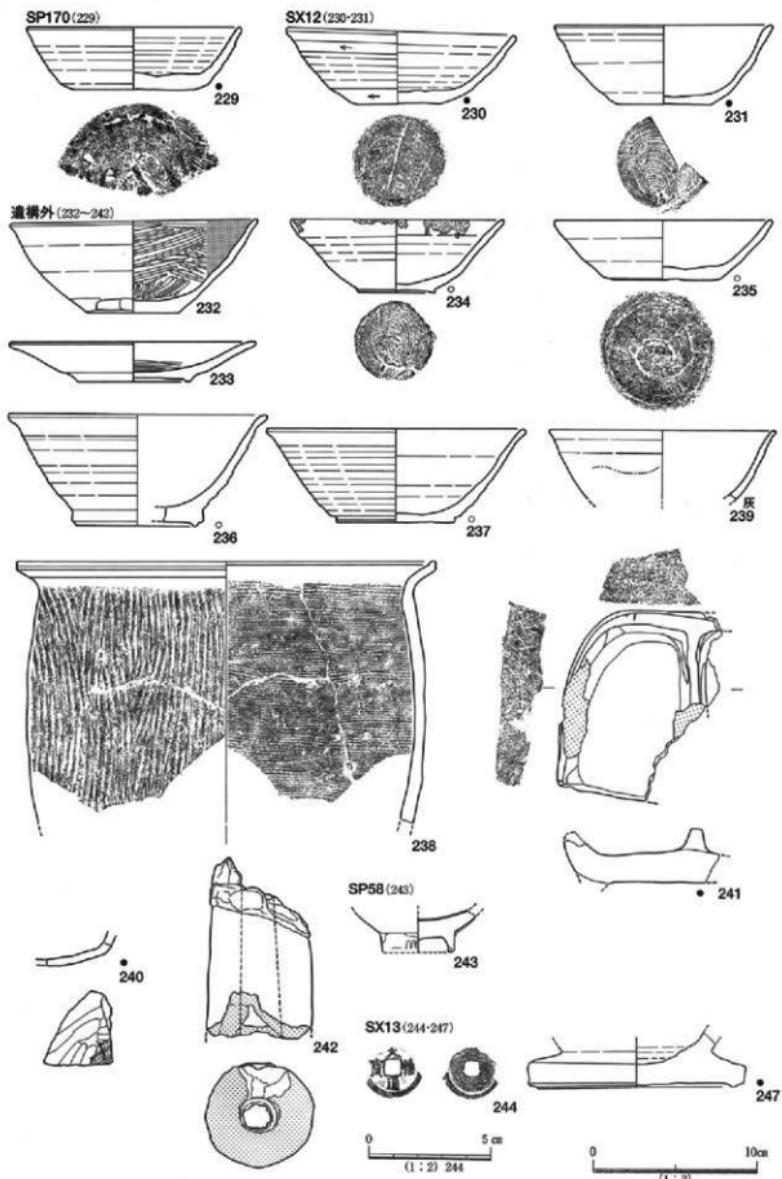
墨書き土器は4点、刻書き土器は1点出土している。墨書き土器4点の内、文字として判読できたものはS I 18の138の須恵器壺に描かれた「安」である。須恵器壺の体部外面に倒立の文字として描かれている。他の墨書き土器3点はS I 16の129とS X 13の246の赤焼土器とSK 249の245の須恵器底部に見られたが状態が悪く判読できなかった。E-14グリッドの240の刻書き土器も底部小破片であり文字としての判読ができなかった。

金属製品は、鉄製品と銅錢（渡来銭）が出土している。SD 5からは227の刀子が1点出土している。銅錢（渡来銭）はS X 13から244の初鑄年1017年の北宋銭の天禧通宝が出土している。

その他、SP 58から中世の輸入陶磁器で外面に鎬蓮弁文を持たない青磁碗片が出土している。



第94図 墨書き・刻書き土器写真



第95図 SP 58・170・SX 12・13・造構外出土遺物

表1 墓穴住居跡一覧表(1) 古墳時代

遺構 番号	位置 (グリッド) (東偏方向)	主軸方向 (東偏方向)	規模 長軸×短軸(m) 床面積(㎡)	炉・竈 位置	主柱穴 (本)	周溝	出入り口ビット 位置	時期
SI 2	D - 9	N 110° E	6.18 × 6.01, 37.1	ほぼ中央か	4	—	南西壁中央部か	前期
SI 3	D-E - 10	N 37° E	6.36 × 5.76, 36.6	北東壁ほぼ中央	4か	—	南西壁中央部	後期
SI 4	C - 8	N 30° E	4.04 × 3.14, 12.7	北東壁中央部やや東寄り	—	—	—	後期、貯藏穴から 炭化米・漆出土
SI 5	C-D - 9	N 37° E	4.56 × 4.48, 20.4	北東壁中央部やや東寄り	—	—	南東壁中央部 やや北寄り	後期
SI 6	F - 8	N 13° E	東西3.68 × 南北1, —	北東壁ほぼ中央	—	—	—	後期
SI 7	E - 10	N 38° E	4.84 × 4.58, 22.2	中央やや西寄り	—	—	—	前期
SI 9	F - 17	N 41° E	5.24 × 3.84, 20.1	—	2	—	—	後期
SI13	G - 20	N 18° E	4.80 × 4.12, 19.8	北壁中央	—	東壁一部	—	後期 異化米出土
SI22	G - 21	N 16° E	南北2.92 × 東西1, —	—	—	—	—	後期
SI23	F - 19	N 26° E	5.04 × 4.52, 21.3	北東壁中央部やや東寄り	—	西・東・南壁	南西壁中央部 やや東寄り	後期
SI24	E-F - 19	N 95° E	5.12 × 4.58, 23.4	東壁北寄り	—	—	—	後期
SI31	E-F - 18	N 19° E	4.32 × 3.98, 16.8	—	—	—	—	後期
SI32	E - 11	N 47° E	5.20 × 5.04, 26.2	北東壁中央部やや東寄りか	6か	—	—	後期
SI39	E - 12 - 13	N 73° E	5.24 × 5.20, 27.2	東壁ほぼ中央	4	—	南壁中央部東寄り	後期
SI43	D - 16	N 32° E	東西4.46 × 南北1, —	—	—	—	—	後期
SI47	E - 11	N 38° E	5.01 × 4.94, 24.7	中央部やや北西寄り	—	—	南東壁南寄り	前期
SI48	E - 14 - 15	N 32° W	6.12 × 5.96, 36.5	北壁ほぼ中央か	4	—	—	後期
SI49	F - 16	N 53° E	4.38 × 3.48, 15.2	—	2	—	北西壁ほぼ中央	後期
SI54	F - 12	N 40° W	4.48 × 4.36, 19.5	北西壁中央部やや東寄り	—	—	北東壁ほぼ中央	後期

表2 墓穴住居跡一覧表(2) 奈良・平安時代

遺構 番号	位置 (グリッド) (東偏方向)	主軸方向 (東偏方向)	規模 長軸×短軸(m) 床面積(㎡)	炉・竈 位置	主柱穴 (本)	周溝	出入り口ビット 位置	時期
SI 1	E - 9	N 30° E	2.75 × 2.46, 6.79	南東角	—	—	—	10世紀初頭
SI10	F - 16 - 17	N 4 ° W	5.04 × 4.94, 23.5	—	—	南・西壁	—	9世紀前半
SI11	F-G - 16	N 16° W	4.80 × 4.24, 17.9	北壁中央部やや西寄り	—	全周	—	10世紀前半
SI12	F - 20	N 3 ° W	4.06 × 3.84, 15.4	南壁か	4か	西壁	—	10世紀前半
SI15	F - 18	N 2 ° W	5.28 × 4.96, 20.5	北壁中央	4	北・東・西壁	—	8世紀代
SI16	F - 15	N 83° E	5.04 × 4.76, 24.0	東壁中央部南寄り	—	—	—	9世紀後半
SI17	F - 16	N 68° E	東西4.12 × 南北1, —	東壁南角	—	—	—	8世紀代
SI18	F - 20	—	—	—	—	—	—	9世紀後半
SI19	F - 19	N 121° W	3.52 × 3.30, 11.6	南壁	—	—	—	9世紀後半
SI20	F - 16	—	—	南壁	—	—	—	—
SI26	G - 12 - 13	—	東西3.02 × 南北1, —	—	—	—	—	—
SI27	E - 11	N 15° W	3.62 × 3.10, 10.0	南壁東端	—	—	—	9世紀後半
SI29	E - 16	N 48° E	4.80 × 4.00, 19.2	北東壁ほぼ中央か	—	—	—	9世紀後半
SI30	F - 19	N 90° E	4.92 × 4.48, 20.1	—	—	北・西壁	南壁中央部 やや東寄り	9世紀前半
SI33	E - 17	N 13° E	3.74 × 3.72, 13.9	—	—	—	—	10世紀前半
SI37	E - 14 - 15	N 23° E	5.38 × 4.65, 21.9	北東壁中央か	—	東壁	—	9世紀後半
SI38	E - 14	N 92° E	2.92 × 2.44, 6.2	北東角	—	ほぼ全周	—	10世紀初頭
SI41	F - 16 - 17	N 9 ° W	6.00 × 5.74, 33.5	—	4か	西壁	—	8世紀代
SI44	F - 14 - 15	N 6 ° E	3.94 × 3.70, 14.6	—	—	—	—	10世紀前半
SI45	E - 14	N 4 ° W	3.12 × 2.70, 8.4	南壁東寄り	—	—	—	10世紀初頭
SI46	E - F - 19	N 88° E	5.12 × 4, 12	—	—	—	—	8世紀代
SI50	E - F - 18	N 85° E	5.86 × 5.02, 29.4	—	—	—	—	10世紀前半

表3 穴住居跡一覧表(3)奈良・平安時代

遺構番号	位置 (グリッド)	長軸方向 (長軸方向)	規模 基軸×短軸(m) 床面積(m ²)	部・窓 位置	柱穴 (本)	周囲	出入り口ピット 位置	時期
SI51	F-13	N 3° W	6.48×6.40, 38.2	—	4	北・南・西壁 南壁中央	8世紀代	
SI52	F-G-15	N 87° E	5.88×4.14, 21.2	—	4	北・南・西壁 南壁中央	10世紀前半	
SI53	E-F-10	N 12° E	3.64×2.95, 10.8	南壁東端	—	—	—	10世紀初頭
SI55	F-G-11	N 18° E	6.08×5.78, 27.4	—	6	北壁全周 南壁中央	9世紀後半	

表4 堀立柱建物跡一覧表

遺構番号	位置 (グリッド)	長軸 方向	平面形式	基長 沿行間×後行間(m) 面積m ² (坪)	柱間寸法(m) (尺)	柱断面(cm)	備考
SB1	E-10~F-11	N 95° E	側柱式 東西棟建物	5間×3間 (11.4×6.6) 75.2 (23.5坪)	桁間2.1~2.4(7~8尺) 梁間2.1~2.4(7~8尺)	径: 長軸76~137、短軸66~114 深: 20~64 平面形: 矩方形、楕円形、	
SB4	D-8	N 1° E	側柱式 南北棟建物	3間×2間 (6.3×4.2) 26.5 (8.3坪)	桁間2.1 (7尺) 梁間2.1 (7尺)	径: 長軸60~101、短軸56~77 深: 17~30 平面形: ほぼ円形、椭円形	P4・5のみ平・ 断面共に柱直を 確認。
SB7	E-15~F-15	N 3° W	側柱式 南北棟建物	3間×2間 (5.7×4.2) 23.9 (7.5坪)	桁間1.8~2.1 (6~7尺) 梁間1.8~2.4 (6~8尺)	径: 長軸33~91、短軸31~78 深: 30~56 平面形: ほぼ円形、椭円形	SB12に切られ る。
SB9	E-11	N 8° E	側柱式 南北棟建物	3間×2間 (6.6×4.8) 31.7 (9.9坪)	桁間2.1 (7尺) 梁間2.4 (8尺)	径: 長軸76~102、短軸62~76 深: 32~45 平面形: ほぼ円形、椭円形	
SB10	C-11~D-12	N 92° E	側柱式 東西棟建物	5間×2間 (13.5×5.1) 68.9 (21.5坪)	桁間2.4~3.0 (8~10尺) 梁間2.4~2.7 (8~9尺)	径: 長軸70~107、短軸60~96 深: 29~57 平面形: 矩方形、楕円形	
SB11	C-12~D-13	N 2° E	側柱式 南北棟建物	2間×2間 (4.5×4.2) 18.9 (5.9坪)	桁間2.1~2.4 (7~8尺) 梁間1.8~2.4 (6~8尺)	径: 長軸57~88、短軸49~78 深: 23~39 平面形: ほぼ円形、椭円形	P3がやや軒から ずれる。
SB12	E-15~F-15	N 1° E	側柱式 南北棟建物	3間×2間 (7.2×5.1) 36.7 (11.5坪)	桁間2.4 (8尺) 梁間2.1~3.0 (7~10尺)	径: 長軸8~120、短軸44~96 深: 17~55 平面形: ほぼ円形、椭円形	
SB13	D-14~E-15	N 4° E	側柱式 南北棟建物	3間×2間 (6.3×4.8) 30.2 (9.4坪)	桁間2.1 (7尺) 梁間2.4 (8尺)	径: 長軸58~98、短軸50~87 深: 20~46 平面形: ほぼ円形、椭円形	
SB16	E-16~-E-17	N 5° W	側柱式 南北棟建物	2間×2間 (4.2×4.2) 17.6 (5.5坪)	桁間2.1 (7尺) 梁間1.5、2.7 (5、9尺)	径: 長軸62~115、短軸58~100 深: 30~39 平面形: ほぼ円形、椭円形	
SB17	D-13	N 6° W	側柱式 南北棟建物	2間×2間 (3.6×3.0) 10.8 (3.4坪)	桁間1.8 (6尺) 梁間1.5 (5尺)	径: 長軸51~86、短軸37~73 深: 26~44 平面形: ほぼ円形、椭円形	

表5 棚列一覧表

遺構番号	位置 (グリッド)	長軸 方向	柱穴数	全長(m) (尺)	柱間寸法(m) (尺)	柱断面(cm)	備考
SA1	D-11~E-10	N 8° E	6	7.80 (26尺)	F4~F5: 1.8 (6尺) その他: 1.5 (5尺)	径: 長軸35~56、短軸35~54、深: 18~37 平面形: 円形、椭円形	

表6 土坑一覧表(1)

遺構番号	位置(タリッド)	平面形	規模 長軸×短軸、深さ(cm)	出土遺物	遺構番号	位置(タリッド)	平面形	規模 長軸×短軸、深さ(cm)	出土遺物
SK000	D-5 (d)	楕円形	111×89, 35		SK061	F-11 (c)	楕丸形	114×72, 32	
SK003	D-5 (d)	楕円形	83×76, 26		SK062	F-11 (a)	ほぼ円形	75×66, 34	
SK006	D-2 (c)	楕円形	53×41, 14		SK064	F-15 (c)	不整方形	128×127, 29	
SK005	C-10 (b)	楕円形	189×156, 12		SK065	F-10 (b)	楕円形	195×163, 49	
SK006	C-5 (a)	円形	51×45, 9		SK067	F-14 (d)	楕丸長方形	288×105, 25	
SK007	C-9 (a)	隅丸方形	81×60, 17		SK068	F-14 (d)	楕丸長方形	142×92, 19	
SK008	C-9 (c)	円形	85×54, 13		SK069	G-14 (b)	楕丸長方形	174×60, 12	
SK009	C-9 (c)	隅丸方形	90×71, 14		SK070	G-14 (a)	楕丸長方形	254×96, 10	
SK011	D-10 (b)	楕円形	220×184, 20		SK071	F-14 (c)	楕円形	342×253, 30	
SK012	E-10 (a)	円形	68×67, 13		SK072	F-13 (c)	楕丸形	182×143, 21	
SK013	E-9 (b)	円形	79×62, 12		SK074	F-12 (c)	不整方形	150×104, 11	
SK014	C-6 (d)	楕円形	254×246, 22		SK077	F-11 (d)	円形	84×80, 27	
SK015	D-10 (d)	楕円形	75×53, 16		SK078	F-11 (d)	ほぼ円形	104×96, 24	
SK016	D-9 (d)	不整椭円形	75×47, 14		SK080	F-13 (a)	不整椭円形	118×98, 22	
SK017	C-10 (d)	円形	67×65, 26		SK081	F-12 (b)	不整長方形	392×107, 14	
SK018	C-11 (d)	円形	76×73, 30		SK082	F-12 (a)	ほぼ円形	107×101, 44	
SK020	D-10 (d)	楕円形	62×48, 24		SK083	F-13 (d)	楕丸形	86×60, 32	
SK021	D-10 (d)	楕円形	63×61, 30		SK084	G-15 (b)	楕丸長方形	127×97, 22	
SK022	G-19 (b)	楕円形	73×62, 17		SK085	G-15 (a)	楕円形	123×97, 37	
SK023	H-19 (b)	楕円形	125×100, 15		SK101	F-19 (b)	円形	94×93, 8	
SK024	G-19 (d)	楕円形	109×94, 6		SK103	F-19 (b)	円形	85×80, 17	
SK025	H-19 (b)	楕円形	106×80, 12		SK104	F-19 (d)	円形	86×83, 28	
SK026	G-19 (c)	楕円形	187×124, 10		SK105	F-16 (d)	楕円形	92×70, 44	
SK028	F-9 (b)	円形	98×92, 15		SK106	F-16 (b)	円形	57×56, 30	
SK029	F-9 (b)	円形	115×112, 27		SK107	F-16 (b)	楕丸形	140×89, 10	
SK030	G-20 (c)	円形	219×189, 25		SK108	F-16 (c)	楕円形	48×36, 32	
SK031	G-20 (a)	不整椭円形	229×132, 11		SK109	F-16 (c)	楕円形	71×46, 25	
SK032	G-19 (b)	ほぼ円形	79×60, 41		SK110	F-19 (b)	楕円形	75×62, 16+J67	
SK033	G-17 (a)	楕円形	293×250, 18		SK112	F-18 (b)	楕円形	148×129, 10	
SK034	G-20 (c)	不整椭円形	183×68, 35		SK113	F-16 (b)	楕円形	62×59, 24	
SK035	G-19 (c)	円形	76×72, 6		SK114	F-16 (d)	楕円形	101×89, 19	
SK036	H-20 (a)	円形	120×114, 28		SK115	F-16 (d)	楕丸長方形	200×52, 28	
SK037	H-22 (b)	楕丸形	122×103, 16		SK117	F-16 (a)	楕丸形	204×97, 18	
SK038	G-16 (c)	楕円形	77×59, 10		SK118	F-16 (b)	楕丸長方形	53×47, 2	
SK040	E-4 (d)	ほぼ円形	145×127, 14		SK119	G-12 (b)	楕円形	89×57, 29	
SK041	D-9 (a)	ほぼ円形か	103×—, 7		SK120	F-16 (d)	不整椭円形	75×64, 21	
SK042	H-20 (a)	楕円形か	—×53, 12		SK121	F-17 (a)	ほぼ円形	100×95, 20	
SK043	G-19 (c)	楕円形	98×61, 11		SK122	F-17 (a)	楕丸形	79×66, 5	
SK044	G-19 (d)	ほぼ円形	93×91, 12		SK124	F-16 (b)	不整椭円形	56×41, 33	
SK045	F-20 (b)	楕円形	88×—, 7		SK125	F-16 (d)	楕円形	36×31, 16	
SK046	G-16 (a)	楕円形	163×122, 21		SK126	F-18 (b)	ほぼ円形	95×92, 10	
SK047	F-20 (c)	円形	70×70, 8		SK127	E-11 (a)	ほぼ円形	210×206, 37	
SK048	G-17 (a)	楕円形	160×102, 10		SK128	F-18 (d)	楕円形	63×42, 15	灰質土
SK049	F-16 (c)	ほぼ円形	55×50, 26		SK129	F-17 (d)	楕円形	63×41, 18	
SK050	F-16 (d)	楕円形	76×56, 6		SK130	E-11 (b)	楕円形	57×49, 32	
SK051	F-11 (b)	楕円形	200×114, 19		SK131	E-18 (c)	楕円形	53×42, 17	
SK054	F-11 (b)	円形	69×60, 47		SK132	F-18 (b)	ほぼ円形	87×80, 9	
SK055	F-12 (a)	ほぼ円形	130×114, 17		SK133	F-18 (b)	楕円形	52×44, 10	
SK056	F-12 (a)	楕円形	55×35, 9		SK134	F-18 (a)	楕丸形	55×51, 8	
SK058	F-11 (a)	円形	63×53, 29		SK135	F-18 (a)	楕丸形	84×54, 47	
SK059	F-11 (a)	ほぼ円形	82×78, 15		SK136	E-16 (b)	楕丸形	65×51, 13	

表7 土坑一覧表(2)

遺構番号	位置 (グリッド)	平面形	規模 長軸×短軸、深さ (m)	出土遺物	遺構番号	位置 (グリッド)	平面形	規模 長軸×短軸、深さ (m)	出土遺物
SK138	F-18 (d)	円形	27×26, 15		SK212	F-15 (d)	ほぼ円形	219×205, 19	
SK139	F-16 (a)	楕円形	83×71, 14		SK213	E-16 (a)	楕円形	106×80, 34	
SK140	G-13 (a)	ほぼ円形	97×82, 16		SK214	D-13 (b)	円形	60×46, 19	
SK141	G-13 (a)	楕円形	114×74, 7		SK216	D-12 (b)	楕円形	212×164, 18	
SK142	G-13 (c)	円形	61×56, 25		SK218	F-15 (a)	楕丸形	64×55, 10	
SK143	G-13 (c)	楕円形	93×86, 9		SK219	F-15 (a)	楕円形	40×36, 7	
SK144	G-13 (a)	円形	45×44, 18		SK220	F-15 (a)	楕円形	40×34, 7	
SK145	G-13 (a)	楕円形	75×61, 15		SK221	E-16 (d)	円形	164×150, 36	
SK146	G-13 (a)	楕円形	74×57, 15		SK222	E-16 (d)	円形	131×128, 34	
SK149	G-13 (b)	ほぼ円形	103×97, 12		SK224	E-16 (d)	楕円形	167×135, 29	
SK150	G-13 (b)	円形	54×51, 20		SK225	E-15 (b)	楕円形	94×67, 26	
SK152	G-13 (a)	楕丸形	180×171, 20		SK227	F-14 (b)	楕丸形	93×78, 16	
SK153	F-15 (a)	ほぼ円形	76×71, 24		SK228	F-14 (b)	楕円形	81×66, 56	
SK154	G-13 (a)	楕円形	68×44, 22		SK229	E-16 (c)	楕円形	100×81, 22	
SK155	G-13 (d)	楕円形	102×55, 29		SK230	E-16 (c)	不整椭円形	102×60, 10	
SK156	G-13 (b)	楕円形	111×80, 19		SK231	F-15 (a)	ほぼ円形	42×49, 23	
SK157	G-13 (b)	円形	64×63, 13		SK232	F-15 (a)	不整椭円形	152×65, 17	
SK159	F-15 (a)	楕丸形	72×45, 30		SK234	F-15 (a)	不整椭円形	152×68, 17	鹿文士器出土
SK160	F-15 (b)	楕丸形	227×180, 52	鹿文士器出土	SK235	E-12 (a)	楕円形	106×82, 7	
SK161	F-19 (d)	楕丸形	83×67, 11		SK236	E-12 (a)	楕円形	95×67, 7	
SK162	E-15 (d)	楕丸形	131×102, 11		SK237	C-12 (a)	楕円形	87×38, 26	
SK163	E-15 (d)	楕丸形	88×74, 27		SK238	F-14 (d)	楕円形	70×53, 14	
SK171	E-15 (c)	ほぼ円形	52×49, 30		SK239	C-12 (d)	円形	44×44, 12	
SK174	F-15 (c)	ほぼ円形	87×80, 24		SK240	C-12 (d)	円形	46×43, 14	
SK176	E-11 (c)	楕円形	57×42, 42		SK241	E-16 (a)	不整椭円形	267×196, 22	
SK177	E-15 (b)	ほぼ円形	98×86, 12		SK242	E-16 (a)	不整椭円形	287×196, 32	
SK178	E-12 (a)	楕円形	53×48, 8		SK243	F-17 (a)	円形	95×60, 46	
SK180	D-12 (d)	楕丸形	164×161, 16		SK244	E-16 (b)	楕円形	89×63, 24	
SK181	E-18 (d)	楕円形	119×102, 19		SK245	E-1 (b)	ほぼ円形	69×68, 47	
SK182	F-18 (d)	楕円形	119×—, 16		SK246	E-16 (b)	楕円形	73×62, 39	
SK183	E-15 (c)	ほぼ円形	114×96, 23		SK247	E-14 (b)	楕丸形	203×146, 36	
SK184	E-14 (d)	ほぼ円形	138×136, 18		SK248	D-13 (d)	楕円形	101×78, 17	
SK185	E-15 (d)	不整椭円形	164×158, 19		SK249	E-15 (d)	楕丸形	290×230, 33	
SK186	E-16 (c)	楕円形	111×83, 30		SK250	D-15 (c)	楕円形か	244×—, 43	
SK188	D-11 (a)	楕円形	71×58, 30		SK251	E-13 (b)	不整椭円形	50×33, 30	
SK189	F-11 (c)	不整椭円形	48×22, 9		SK252	E-13 (c)	ほぼ円形	77×68, 8	
SK190	F-11 (c)	円形	27×27, 23		SK253	E-13 (c)	ほぼ円形	101×85, 27	
SK191	F-15 (a)	楕円形	—×47, 26		SK254	E-12 (b)	楕円形	72×57, 41	
SK192	F-15 (a)	楕丸形	114×64		SK255	E-13 (c)	楕丸形	171×94, 14	
SK193	F-15 (a)	楕円形	112×86, 28		SK256	D-11 (c)	楕円形	507×182, 15	
SK194	F-15 (a)	楕円形	88×64, 14		SK257	D-11 (c)	ほぼ円形	83×71, 29	
SK195	F-16 (b)	楕円形	107×48, 30		SK259	E-13 (c)	楕丸形	87×36, 14	
SK196	F-15 (a)	ほぼ円形	383×250, 28		SK260	D-13 (c)	楕円形	232×198, 25	
SK199	E-17 (a)	ほぼ円形	62×54, 37		SK261	D-15 (c)	楕丸形	180×156, 32	
SK200	E-17 (a)	ほぼ円形	111×99, 18	鹿文士器出土	SK262	D-14 (d)	楕円形	241×170, 25	
SK202	E-17 (a)	ほぼ円形	45×45, 14		SK263	D-14 (d)	楕円形	252×266, 27	
SK203	F-15 (b)	楕円形	90×80, 31		SK264	D-14 (b)	楕円形	113×—, 16	
SK205	E-16 (b)	楕丸形	214×—, 43		SK265	D-13 (c)	楕円形	125×99, 11	
SK209	E-17 (a)	楕円形	102×74, 14		SK266	E-14 (c)	楕円形	59×44, 15	
SK210	F-17 (a)	楕円形	50×45, 19		SK267	E-13 (d)	楕円形	106×26, 23	
SK211	E-16 (d)	ほぼ円形	72×66, 10		SK268	E-14 (d)	ほぼ円形	137×127, 10	

表8 土坑一覧表(3)

遺構番号	位置 (グリッド)	平面形	規模 長軸×短軸、深さ(cm)	出土遺物
SK269	E-13 (b)	楕円形	1.14×0.67, 11	
SK270	E-14 (a)	楕円形	1.05×0.47, 15	
SK276	D-13 (c)	ほぼ円形	204×184, 19	
SK278	D-12 (d)	楕円形	228×184, 33	
SK279	D-12 (d)	楕円形	228×184, 33	
SK281	D-15 (d)	円形	65×60, 32	
SK282	E-15 (b)	楕円形	69×54, 19	
SK283	E-15 (b)	楕円形	72×56, 18	
SK284	E-15 (b)	楕円形	127×76, 48	
SK285	F-16 (a)	楕円形	—×103, 24	
SK286	F-16 (a)	円形	50×40, 20	
SK287	F-15 (c)	ほぼ円形	71×66, 22	
SK288	F-15 (a)	不整圓形	113×90, 13	
SK289	F-15 (a)	楕円形	63×45, 18	
SK290	D-13 (c)	楕丸方形	250×200, 26	
SK291	E-13 (b)	ほぼ円形	96×87, 22	
SK293	D-13 (a)	不整圓形	142×123, 17	
SK295	D-12 (b)	楕円形	227×152, 28	
SK296	D-13 (a)	円形	56×49, 42	
SK297	E-12 (b)	楕円形	145×96, 14	
SK299	C-12 (c)	楕丸方形	171×70, 17	
SK300	C-12 (c)	楕丸方形	125×82, 26	
SK302	F-14 (b)	楕丸方形	189×132, 14	
SK303	D-14 (d)	楕丸方形	93×56, 54	
SK304	D-14 (c)	楕円形	88×56, 17	
SK305	D-15 (c)	ほぼ円形	56×47, 36	
SK306	D-14 (b)	楕丸方形	117×75, 10	
SK308	F-19 (d)	円形	67×65, 20	
SK309	F-19 (d)	円形	71×67, 28	
SK310	F-17 (b)	楕円形	112×64, 45	
SK311	D-11 (c)	楕丸方形	61×43, 6	
SK314	D-12 (b)	楕丸方形	117×42, 27	

遺構番号	位置 (グリッド)	平面形	規模 長軸×短軸、深さ(cm)	出土遺物
SK315	E-11 (a)	ほぼ円形	74×66, 14	
SK316	D-11 (c)	楕円形	57×45, 35	
SK317	D-11 (a)	楕円形	59×56, 25	
SK318	D-12 (c)	ほぼ円形	61×61, 18	
SK319	D-11 (c)	楕円形	53×42, 33	
SK321	F-14 (b)	楕円形	81×57, 10	
SK322	E-16 (a)	楕円形	123×—, 11	
SK323	E-16 (a)	楕円形	98×82, 23	
SK330	F-16 (a)	楕円形	102×59, 26	
SK331	D-11 (c)	楕円形	80×52, 41	
SK332	E-13 (d)	楕円形	130×82, 12	
SK333	E-12 (b)	楕円形	57×41, 30	
SK335	E-13 (a)	楕円形	71×48, 30	
SK336	D-11 (d)	楕円形	103×85, 11	
SK338	D-11 (d)	ほぼ円形	58×52, 24	
SK340	E-13 (d)	楕丸方形	82×66, 15	
SK342	C-11 (d)	楕丸方形	68×67, 37	
SK346	D-14 (d)	円形	76×75, 17	
SK347	C-13 (c)	楕円形	65×57, 33	
SK349	D-13 (a)	楕丸方形	169×118, 28	
SK350	E-13 (a)	円形	79×62, 17	
SK351	F-18 (a)	楕丸方形	58×52, 28	
SK352	F-18 (d)	円形	59×56, 12	
SK354	E-15 (b)	楕丸方形	134×103, 15	
SK355	E-15 (b)	楕円形	82×66, 14	
SK356	E-16 (a)	不整長方形	252×122, 21	
SK357	E-16 (a)	不整長方形	252×122, 21	
SK358	E-16 (a)	不整長方形	252×122, 21	
SK359	D-14 (b)	円形	79×74, 8	
SK360	D-14 (b)	楕円形	85×68, 5	
SK361	E-13 (d)	楕円形	95×77, 11	
SK362	E-13 (a)	ほぼ円形	214×193, 21	

表9 溝跡一覧表(1)

遺構番号	位置 (グリッド)	走行態様	断面形	方向	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	備考
SD01	B-2-B-3	ほぼ直線的に走行	直状	東～西	16.9以上	0.50～0.52	4～11	中・近世か
SD03	C-10-E-10	ほぼ直線的に走行	直状	北～南	27.7以上	0.48～1.35	11～16	古墳時代内黒坏出土
SD04	C-10-E-10	ほぼ直線的に走行	直状	北～南	26.6以上	0.5～1.35	11～16	古墳時代土器器変出
SD05	C-10-D-12	ほぼ直線的に走行両端は直角へY字状に曲がる	逆Y字状	北～南	23.8	0.35～0.75	14～30	9C前半～1酒器、瓦片出土 SB10に伴うものか
SD06	I-26-J-26	直線的に走行	直状	東～西	8.3以上	3.52～4.40	20～30	
SD07	I-26-J-26	直線的に走行	逆Y字状	北東～南西	19.6以上	1.30以上	45	
SD08	I-26-J-26	ほぼ直線的に走行	直状	北～南	8.2	0.4	32.3	SD06と切りあう
SD09	F-21-H-21	ほぼ直線的に走行	直状	東～西	17.5以上		19	
SD10	H-20-H-21	ほぼ直線的に走行両端は直角へY字状に曲がる	すり棒状	北～南	15	1.74～3.58	12～68	古墳時代 5C末頃の土器器変出土
SD11	F-22-H-22	直線的に走行	直状	北～南	16.9以上	0.46～1.12	12.3	SD13と隣接
SD12	G-14-F-21	蛇行しながら走行	直状	西～東	6.4以上	0.46～0.68	13.6	中・近世か
SD13	F-22-E-22	直線的に走行	直状	北～南	16.4以上	0.64～1.38	26.4	SD11と隣接
SD14	G-15-G-18	蛇行しながら走行	直状	東～西	30.2	0.20～0.43	11.9	中・近世か

表10 溝跡一覧表(2)

遺構番号	位置(グリッド)	走行形態	断面形	方向	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	備考
SD15	E-4～E-5	直線的に走行	直状	東～西	5.6	0.18～0.40	10.5	
SD16	H-23	直線的に走行	直状	北～南	3.8	0.40～0.45	18	
SD17	H-23	直線的に走行	直状	北～南	2.8	0.21～0.32	10	
SD19	E-16	直線的に走行	直状	西～東	4.9以上	0.30～0.56	20	中・近畿か
SD20	C-12～G-14	ほぼ直線的に走行し端端で東方向へL字状に曲がる	すり鉢状	—	39.0以上	0.86～1.24	28	中・近畿か
SD22	G-12	直線的に走行	直状	西～東	9.0以上	0.18～0.40	11	中・近畿か
SD23	F-21	直線的に走行	直状	東～西	1.8以上	0.21～0.26	6	
SD24	G-21	直線的に走行	直状	東～西	2.0以上	0.16～0.39	10	
SD27	F-18	直線的に走行	直状	東～西	4.4	0.47～0.78	10	
SD61	D-13～G-13	直線的に走行	直状	北西～南東	28.3以上	0.12～0.25	10	9C土器器内品環、壺出土
SD62	F-14～G-13	直線的に走行	直状	北～南	8.5	0.20～0.32	14	9C余焼坑、壺底器出土
SD65	F-14	蛇行しながら走行	直状	北～南	3.7	0.40～0.92	18	9C第2～3四半期

表11 ピット一覧表(1)

遺構番号	位置(グリッド)	平面形	規模 長軸×短軸、深さ(cm)	出土遺物
SP001	C-9 (a)	円形	67×64, 9	
SP002	C-9 (c)	椭円形	78×68, 9	
SP003	C-9 (c)	円形	71×58, 26	
SP004	C-9 (c)	椭円形	44×32, 17	
SP005	C-9 (a)	円形	18×15, 21	
SP006	D-10 (b)	椭円形	51×37, 29	
SP008	C-9 (d)	円形	37×36, 27	
SP009	D-10 (d)	ほぼ円形	54×51, 24	
SP010	D-10 (d)	椭円形	73×53, 36	
SP011	D-10 (d)	円形	37×35, 45	
SP012	D-10 (d)	椭円形	62×48, 40	
SP013	D-10 (d)	ほぼ円形	65×59, 22	
SP015	H-19 (b)	椭円形	49×43, 7	
SP016	H-19 (b)	円形	74×66, 3	
SP017	G-19 (d)	椭円形	71×53, 5	
SP018	G-19 (c)	椭円形	55×45, 3	
SP019	H-19 (a)	円形	34×31, 13	
SP020	H-19 (a)	円形	44×41, 12	
SP021	G-19 (c)	椭円形	50×41, 6	
SP022	F-17 (d)	椭円形	59×38, 10	
SP024	G-17 (b)	椭円形	35×30, 13	
SP025	G-17 (b)	円形	32×31, 5	
SP026	F-17 (d)	円形	35×34, 22	
SP027	F-17 (d)	円形	39×37, 3	
SP028	H-19 (a)	円形	51×48, 5	
SP029	G-17 (b)	椭円形	56×43, 20	
SP030	G-17 (b)	椭円形	38×34, 13	
SP031	F-18 (d)	円形	43×42, 19	
SP032	F-18 (d)	ほぼ円形	63×57, 16	
SP033	F-18 (d)	ほぼ円形	59×48, 15	
SP034	F-18 (d)	1212円形	56×46, 12	
SP035	F-18 (d)	円形	42×42, 7	
SP036	G-18 (c)	円形	33×32, 8	

遺構番号	位置(グリッド)	平面形	規模 長軸×短軸、深さ(cm)	出土遺物
SP037	G-17 (d)	円形	32×27, 4	
SP038	E-10 (d)	円形	40×38, 18	
SP039	F-10 (b)	椭円形	54×38, 23	
SP040	E-10 (c)	円形	32×27, 23	
SP041	G-21 (d)	椭円形	35×21, 9	
SP042	G-21 (c)	椭円形	29×26, 10	
SP043	G-15 (d)	円形	56×56, 21	
SP044	G-16 (d)	椭円形	38×28, 5	
SP045	G-19 (c)	円形	32×32, 8	
SP046	H-19 (a)	椭円形	61×41, 14	
SP047	H-19 (a)	椭円形	49×31, 5	
SP048	G-20 (c)	円形	37×33, 10	
SP049	G-17 (a)	円形	38×36, 11	
SP050	G-17 (a)	椭円形	28×22, 19	
SP051	F-14 (d)	椭円形	34×25, 15	
SP052	F-14 (d)	ほぼ円形	62×52, 14	
SP053	F-13 (d)	円形	42×40, 32	
SP054	F-13 (c)	椭円形	79×37, 23	
SP055	F-11 (b)	円形	57×54, 28	
SP056	F-11 (c)	椭円形	46×38, 25	
SP057	F-11 (a)	円形	71×67, 23	
SP058	F-14 (c)	椭円形	33×26, 27	
SP059	F-12 (b)	椭円形	25×19, 21	
SP060	F-12 (b)	円形	27×26, 22	
SP061	F-13 (d)	椭円形	63×42, 5	
SP062	F-13 (a)	不整椭円形	60×46, 32	
SP063	F-11 (b)	椭円形	45×32, 23	
SP064	F-12 (a)	ほぼ円形	46×42, 9	
SP065	F-12 (c)	円形	20×18, 11	
SP066	F-11 (d)	円形	28×24, 12	
SP067	F-11 (a)	椭円形	61×47, 26	
SP068	F-11 (a)	椭円形	66×50, 12	
SP069	F-11 (a)	不整方形	60×49, 11	

表12 ピット一覧表(2)

遺構 番号	位置 (グリッド)	平面形	規模 長軸×短軸、高さ (m)	出土遺物
SP070	F-11 (c)	円形	32×30, 27	
SP083	F-12 (d)	楕円形	58×49, 48	
SP084	F-14 (c)	楕円形	38×28, 30	
SP085	F-13 (d)	楕円形	44×27, 22	
SP086	F-10 (d)	円形	26×25, 16	
SP087	F-10 (d)	楕円形	40×23, 7	
SP088	F-10 (d)	楕円形	54×40, 5	
SP089	F-13 (b)	円形	38×35, 26	
SP090	F-13 (b)	楕円形	45×~-, 23	
SP091	F-13 (a)	楕円形	42×~-, 12	
SP092	F-15 (c)	楕円形	39×31, 16	
SP093	G-11 (a)	ほぼ円形	45×42, 24	
SP101	E-11 (c)	楕円形	58×48, 36	
SP102	G-16 (b)	円形	25×20, 21	
SP103	G-16 (b)	円形	32×28, 20	
SP104	G-16 (a)	楕円形	47×39, 18	
SP105	G-16 (a)	楕円形	37×23, 4	
SP106	G-16 (a)	楕円形	45×36, 19	
SP107	G-15 (b)	円形	33×30, 29	
SP108	G-19 (a)	楕円形	72×57, 16	
SP109	G-19 (a)	円形	34×31, 10	
SP110	F-19 (b)	楕円形	73×55, 42	
SP111	G-17 (b)	円形	39×34, 20	
SP112	G-18 (a)	楕円形	49×38, 20	
SP113	F-18 (a)	楕円形	39×33, 16	
SP114	F-18 (a)	円形	49×37, 16	
SP115	E-17 (c)	円形	57×52, 32	
SP116	E-17 (c)	楕円形	40×34, 14	
SP117	E-16 (b)	ほぼ円形	47×41, 25	
SP118	E-16 (b)	楕円形	45×36, 23	
SP119	E-17 (d)	楕円形	49×36, 34	
SP120	E-16 (b)	楕円形	49×41, 21	
SP121	E-16 (b)	楕円形	33×29, 18	
SP122	E-17 (d)	円形	52×46, 27	
SP124	E-16 (a)	ほぼ円形	48×34, 27	
SP125	F-16 (b)	円形	58×52, 21	
SP126	F-16 (b)	楕円形	58×44, 21	
SP127	F-15 (a)	楕円形	34×27, 12	
SP128	F-15 (c)	ほぼ円形	50×41, 30	
SP129	E-11 (d)	楕円形	60×35, 41	
SP130	F-16 (a)	楕円形	76×44, 27	
SP131	F-16 (a)	円形	42×39, 37	
SP132	F-16 (a)	円形	18×17, 28	
SP140	E-13 (c)	円形	35×31, 9	
SP141	E-13 (c)	円形	41×38, 10	
SP142	E-13 (c)	円形	37×32, 6	
SP143	E-11 (d)	円形	42×41, 10	
SP144	E-13 (c)	円形	45×40, 35	
SP145	E-13 (c)	ほぼ円形	36×34, 34	
SP146	E-13 (c)	円形	61×52, 16	
SP147	C-12 (d)	円形	32×29, 13	
SP148	D-12 (c)	楕円形	64×48, 33	
SP149	D-12 (d)	円形	53×52, 26	
SP150	D-12 (d)	円形	52×51, 28	
SP153	E-17 (a)	楕円形	61×37, 34	
SP154	C-11 (d)	円形	41×35, 16	
SP155	C-11 (d)	円形	50×44, 27	
SP156	C-11 (d)	円形	35×34, 3	
SP157	C-12 (c)	楕円形	43×36, 3	
SP158	C-12 (c)	円形	31×30, 9	
SP159	C-12 (c)	楕円形	40×29, 27	
SP160	C-12 (c)	楕円形	35×24, 26	
SP161	C-11 (d)	ほぼ円形	44×36, 18	
SP162	C-13 (c)	楕円形	49×48, 24	
SP163	E-12 (a)	ほぼ円形	54×52, 16	
SP164	D-11 (d)	楕円形	45×37, 27	
SP165	D-12 (c)	円形	45×42, 19	
SP166	E-13 (d)	円形	51×50, 15	
SP167	E-11 (a)	円形	25×34, 16	
SP168	E-11 (a)	円形	54×50, 13	
SP169	E-13 (d)	隅丸方形	60×48, 35	
SP170	E-13 (d)	楕円形	41×33, 31	
SP171	D-13 (a)	隅丸方形	58×46, 45	
SP172	D-13 (c)	隅丸方形	64×59, 17	
SP173	D-13 (c)	円形	49×46, 18	
SP174	E-13 (a)	隅丸方形	39×24, 16	
SP175	E-13 (a)	隅丸方形	29×27, 13	
SP176	D-12 (d)	円形	32×31, 15	
SP177	D-14 (b)	楕円形	69×50, 35	石器土器
SP178	E-11 (b)	楕円形	63×60, 31	
SP179	E-11 (b)	楕円形	62×60, 27	
SP180	E-11 (b)	ほぼ円形	71×64, 41	
SP181	E-14 (c)	楕円形	62×46, 31	
SP182	E-13 (c)	楕円形	47×35, 16	
SP183	D-13 (d)	ほぼ円形	50×49, 29	
SP184	E-15 (b)	ほぼ円形	35×32, 18	
SP185	E-15 (b)	ほぼ円形	31×28, 34	
SP186	E-15 (b)	楕円形	46×32, 39	
SP188	E-13 (a)	楕円形	64×44, 22	
SP190	D-13 (c)	隅丸方形	57×46, 44	
SP191	F-19 (a)	楕円形	40×32, 24	

*各遺構の番号は以下の通りである。

堅穴柱形跡：S 1-8-14-21-26-28-34-36-40-42
 立柱立柱跡：S 2-3-5-6-8-14-15
 土坑：S K 1-10-19-27-39-52-53-57-60-63-66-73-75-76-79-86-100-102-111-116-123-137-147-148-151-158-164-170-172-173-175-179-187-197-198-201-204-206-208-215-217-222-226-233-258-271-275-277-280-292-294-298-301-307-312-313-320-324-329-334-337-339-341-343-345-348-353
 溝跡：S D 2-18-21-25-26-28-50-53-54
 ピット：S P 7-14-23-71-82-94-100-123-133-139-151-152-187-189

表13 遺物観察表（1）

図版番号	出土地点	種類	器種	計測値			鉄土 (鉄・土・石製品は寸貫と重量(g))	調査技法		底部調査 その他の 内面
				口径	底径	高さ		内面	外面	
1	SB02 築り方	陶文	鉢形	17.4	6.0	13.2	石英・長石、海綿骨粉	ミガキ		
2	SE01 覆土	陶文	鉢形	(14.2)	6.2	—	石英・長石	ミガキ		
3	SB01 覆内	石器	石盤	長 (6.0)	幅1.2	厚0.6	珪質頁岩 / (4.2g)			
4	SP177 覆土	石器	石盤	長4.4	幅1.5	厚0.5	珪質頁岩 / 2.0g			
5	遺跡外 フラット (C-46)	石器	石盤	長 (3.8)	幅1.2	厚0.45	珪質頁岩 / (1.9g)			
6	SB02 覆土	土師器	小形容器	9.0	—	—	白色砂粒少量	ミガキ	ミガキ	
7	SB02 覆土	土師器	小形容器	—	(10.0)	—		ミガキ	ミガキ	内外・赤茶
8	SB02 覆土中層	土師器	小形容器	—	(8.8)	—	暗赤褐色紋	ミガキ		内・薄茶
9	SB02 覆土	土師器	壺形	(22.0)	—	—	白色砂粒、海綿骨粉少量	ミガキ	ミガキ	
10	SB02 覆土中層	土師器	小形器	7.6	3.0	4.3	淡分離	ミガキ	ミガキ	
11	SB02 覆土	土師器	壺	8.9	—	5.0	石英輝・砂粒少量	ハケ目→ミガキ		
12	SB02 覆土中層	土師器	鉢	16.0	3.2	7.7	石英輝 (2mm大) 少量	ミガキ	ミガキ	
13	SB02 覆土中層	土師器	中形壺	—	4.3	—	石英・白色砂粒少量			内外・赤茶
14	SB02 覆土	土師器	壺	(24.0)	—	—	石英輝少量	ミガキ?	ミガキ?	
15	SB02 覆土	土師器	壺	(20.0)	—	—	石英砂粒			
16	SB02 覆土中層	燧石	塊	25.5	幅3.1	厚2.8	34.0g			
17	SB07 覆土下層	土師器	鉢	9.2	2.9	6.1	石英輝少量	ミガキ	ミガキ	赤茶・銀針目
18	SB07 覆土下層	土師器	鉢	15.7	3.3	8.3	石英輝少量	ミガキ	ミガキ	
19	SB07 覆土下層	土師器	中形壺	12.6	—	—	石英輝少量	ミガキ	ハケ目→ミガキ	
20	SB07 覆土	土師器	壺	16.3	—	—	石英輝多量	ハケ目	ハケ目	
21	S447 覆土	土師器	高杯	—	—	—	細砂粒	ナデ	ミガキ	
22	S447 覆土	土師器	鉢	13.0	—	7.0	細砂粒多量	ミガキ	ミガキ	
23	S447 覆土	土師器	白付鉢	(12.4)	10.8	—	石英砂粒多量		ミガキ	摩耗
24	SB03 覆土	土師器	壺	15.1	—	5.1	石英主徳の細砂粒少量	ミガキ		
25	SB03 覆土	土師器	壺	13.1	—	5.0	石英主徳の砂粒少量	ミガキ	ミガキ・ナデ	
26	SB03 覆土	鹿毛器	壺	9.8	—	4.5	雜良、白色微細砂粒少量	ナデ	圓軸ヘリ削り	
27	SB03 覆土	土師器	壺	(14.5)	—	—	砂粒多量 (半透明砂粒を主体)	ナデ	ナデ	
28	SB03 覆土	土師器	壺	(18.2)	—	—	石英輝	ナデ	ハケ目	
29	SB03 覆土	土師器	彷彿壺	下面径4.3	上端径3.4	高1.6	(9.0g)			
30	SB04 覆土	土師器	壺	13.4	—	4.8	石英輝	ミガキ		
31	SB04 覆土	土師器	瓶	15.3	5.0	11.8	石英輝	ナデ	削り	
32	SB04 覆土	土師器	壺	—	—	—	石英輝多量			内外・赤茶
33	SB04 覆土	土師器	壺	(16.0)	—	—	石英輝多量	ナデ	ハケ目	
34	SB05 覆土下層	土師器	壺	12.9	—	4.3	長石・石英輝多量	ミガキ	ナデ	
35	SB05 電線箱室内	土師器	壺	12.2	—	5.0	長石・石英輝	ナデ		
36	SB05 覆土下層	土師器	壺	16.4	—	—	粗砂粒多量	ナデ		内外・摩耗
37	SB05 覆土下層	土師器	壺	(13.2)	—	—	石英輝	ミガキ	ミガキ	
38	SB05 覆土下層	土師器	壺	14.5	—	—	石英・石英輝多量		ハケ目	外・摩耗
39	SB05 覆土下層	石質陶器	勾玉	長3.6	幅2.4	厚0.4	滑石類/8.2g			
40	SB05 覆土下層	石質品	白玉	—	—	—	滑石類			
41	SB05 覆土下層	石質品	白玉	—	—	—	滑石類			
42	SB06 駐藏穴内覆土	土師器	壺	14.6	—	—	長石・石英砂粒	ナデ	ミガキ	
43	SB06 覆土	儀器器	壺	—	—	—	白色砂粒微量	同心円文 ナカレ	平行タキ目	
44	SB09 覆土下層	土師器	壺	13.5	—	5.4	細砂粒多量	ミガキ		
45	SB09 覆土下層	土師器	壺	6.4	—	14.6	細砂粒多量			外・摩耗
46	SB09 覆土下層	土師器	壺	13.6	—	—	石英砂粒多量	削り	ハケ目	
47	SB09 覆土下層	土師器	小形壺	12.8	4.1	11.9	細砂粒多量	ナデ	ハケ目	外・摩耗
48	SB09 覆土	儀器器	壺	—	—	—	白色微細砂粒少量	ナリ削し	扇子タキ目	
49	SI13 覆土下層	土師器	壺	16.0	—	—	石英輝・長石微細砂粒	ナデ	ナデ	
50	SI13 覆土下層	土師器	壺	8.0	—	—	金青輝・長石微細砂粒少量	ハケ目	ミガキ	
51	SI13 覆内	土師器	壺	15.1	5.7	30.7	細砂粒多量	ナデ	ナデ	

表14 遺物観察表(2)

図版 番号	出土地点	種類	剖面	剖面値			粘土 (土・石・石器は材質と重量(g))	測定法 内面 外面	底部調整 その他
				口径	底径	高さ			
52	SI13 室内	土師器	甌	14.5	—	—	粗砂少量	ナダ	ナダ
53	SI13-SP2-5 覆土	土師器	甌	(13.5)	—	—	砂粒少量	ハケ目	ハケ目
54	SE22 覆土	土師器	高环	—	8.6	—	灰白色糊	ミガキ	ミガキ
55	SE23 床着	土師器	甌	15.3	—	10.3	石尚微少少量	ナダ	ミガキ
56	SE23 覆土下層	土師器	甌	15.6	—	—	石英・白色砂粒多量	ナダ	ハケ目
57	SE23 覆土下層	土師器	甌	17.0	—	—	石英砂砾少量	ナダ	ハケ目
58	SE23 覆土下層	土師器	甌	10.6	4.8	11.4	石英砂砾多量	ナダ	ハケ目
59	SE23 覆土下層	石製品	磨練車	上直径4.6	下直径2.6	厚1.7	滑石製/46.28g		
60	SE23 覆土下層	土師器	土玉	内径0.4	幅3.8	高3.6	44.19g		
61	SE23 覆土下層	土師器	土玉	内径0.5	幅4.0	高3.5	37.86g		
62	SE23 覆土下層	土師器	土玉	内径0.5	幅2.6	高3.4	16.92g		
63	SE23 覆土下層	土師器	土玉	内径0.5	幅3.0	高2.3	16.16g		
64	SE23 覆土	石製品	鏡石	長28.3	幅14.4	厚5.2	鋼灰岩/330.6g		
65	SE24 覆土中層	土師器	甌	16.1	3.9	8.6	白色糊・軸子少量	ミガキ	内:摩耗
66	SE24 覆土中層	土師器	甌	(15.2)	—	5.2	石英微砂粒	ミガキ	赤彩
67	SE24 床着	土師器	甌	16.1	—	—	石英微砂粒	ハケ目	ナダ
68	SE24 床着	土師器	甌	17.8	—	—	石英微砂粒	ナダ	ハケ目
69	SI31 覆土	土師器	甌	15.8	5.0	11.8	細砂粒多量	ハケ目	外:擦耗
70	SI31 覆土	土師器	甌	14.6	—	—	石英微砂粒多量	ハケ目	ハケ目
71	SI32 覆土	土師器	甌	(13.3)	—	4.6	鉄分鉱少量	ミガキ	ミガキ、ナダ
72	SI32 覆土	土師器	高环	—	—	—	細砂粒		摩耗
73	SI32 床着	土師器	甌	—	8.2	—	微砂粒少量	ナダ	ハケ目→ミガキ 内:擦耗
74	SI32-SP1 覆土	土師器	甌	15.4	7.1	28.0	金雲母片少量	ナダ	ハケ目
75	SI39 室内	土師器	甌	12.6	—	4.1	石英微砂粒少量	ミガキ	内:擦耗
76	SI39 覆土	土師器	甌	13.9	—	5.1	石英微砂粒少量	ミガキ	外:擦耗
77	SI39 覆土	土師器	甌	(12.8)	—	—	石英微砂粒、雲母粒子	ミガキ	ミガキ
78	SI39 室内	土師器	甌	12.1	—	—	白色微砂粒少量	ミガキ、ナダ	外:擦耗
79	SI39 覆土	土師器	甌	18.1	—	—	鐵砂粒多量	ナダ	ハケ目
80	SI39 覆土	土師器	甌	—	—	—	白色微砂粒少量	ナダ	ミガキ 内:擦耗
81	SI39-SP1 覆土	土師器	甌	23.9	—	—	長石・石英微粒子多量	ナダ	ミガキ?
82	SI39 室内	土師器	甌	—	7.2	—	石英粒・輝・雲母微砂粒多量	ナダ	ナダ 外:擦耗
83	SI43 覆土下層	土師器	甌	(13.4)	—	4.7	長石微粒子少量	ナダ	外:擦耗
84	SI43-SP1 覆土	土師器	甌	—	—	—	細砂粒多量	ナダ	外:擦耗
85	SI43 覆土下層	土師器	甌	15.1	5.3	11.8	鐵砂粒	ハケ目	外:擦耗
86	SI43 覆土下層	土師器	小形甌	13.8	4.6	—	石英砂粒	ナダ	ナダ
87	SI48 覆土	土師器	甌	17.0	—	5.4	鐵質		外:擦耗
88	SI48 室内	土師器	甌	15.2	—	7.8	灰白色糊少量	ミガキ	ミガキ 内:擦耗
89	SI48 覆土	土師器	甌	(17.0)	—	—	鐵砂粒多量	ナダ	ハケ目
90	SI48 覆土	土師器	甌	G206	—	—	鐵砂粒	ハケ目	ハケ目、ナダ
91	SI48 室内	土師器	甌	21.6	—	—	赤褐色鉄分鉱	ナダ	ハケ目
92	SI49 覆土下層	土師器	甌	(27.0)	—	5.8	灰白色糊		摩耗
93	SI49 覆土下層	土師器	甌	(13.7)	—	6.2	鐵砂粒	ヘラミガキ 回り	
94	SI49 覆土中層	土師器	甌	(16.6)	—	—	鐵砂粒多量	ナダ	ハケ目
95	SI49 覆土中層	土師器	甌	14.8	—	—	鐵砂粒多量	ナダ	ハケ目
96	SI54 室内	土師器	甌	13.8	—	—	赤褐色鉄分鉱少量	ミガキ	ミガキ、ナダ
97	SI54 覆土	土師器	甌	14.2	—	5.1	石英主体の鐵砂粒少量	ミガキ	回り
98	SI54-SP2 覆土	土師器	甌	22.5	8.8	12.2	鐵砂粒、小形多量	ナダ	外:摩耗
99	SI54 覆土	土師器	甌	19.0	—	—	鐵砂粒多量		ハケ目
100	SI54 室内	土師器	甌	15.9	—	—	赤褐色鉄分鉱少量	ミガキ	ミガキ
101	SI54 囲り方	土師器	甌	16.3	—	—	鐵砂粒多量	ナダ	ナダ
102	SI54 野戦穴内覆土	土師器	甌	21.7	10.5	30.8	鐵砂粒多量	ハケ目	ハケ目

表15 遺物観察表（3）

器皿 番号	出土地点	種類	器形	計測値			埴土 (鉱・土・石製品は材質と重量(g))	内面	調整技法	底部調整 その他
				口径	底径	器高				
103	SI54 墓土	土師器	壺	18.4	—	—	細砂粒	ハケ目	ナゲ	
104	SI54 園り方	土師器	小形壺	10.9	—	—	細砂粒少量	ナゲ	ミガキ	
105	SK09 墓土下層	土師器	壺	13.0	—	—	石英砂粒主体の細砂粒	ミガキ		
106	SK78 墓土	手盆	坪	11.1	6.1	3.1	細砂少量			底部木臺板
107	SX08 墓土	石製品	瓦孔円瓶	馬4.5	幅5.0	厚0.5	陶石質/17.9g			
108	遺構外「ガ」(E-11)	土師器	壺	(13.0)	6.0	12.9	石英主張の砂粒多量	ナゲ	ハケ目	
109	遺構外「ガ」(F-14c)	須恵器	壺	(9.0)	—	—	微分微粒、長石粒の砂粒			
110	遺構外「ガ」	須恵器	壺	(20.0)	—	—	微砂粒・埴土に長石粒、微分粒			
111	遺構外「ガ」(G-17)	須恵器	壺	—	—	—	白色微粒			
112	遺構外 武深	埴輪	円筒埴輪	—	—	—	石英主張の砂粒			
113	SB01 墓土下層	赤陶土器	坪	12.1	4.4	4.1	赤褐色多量		内側・前	
114	SH10 墓土下層	須恵器	坪	(12.6)	5.6	3.0	白色微粒		同上・後	
115	SH10 墓土下層	赤陶土器	坪	(14.5)	7.0	5.5	石英主張の砂粒		同上・後	
116	SH11 墓土下層	赤陶土器	坪	12.1	5.6	4.8	細砂粒含む		同上・後	
117	SH11 墓土	土師器	壺	—	—	—			写真撮影20	
118	SH11 墓土	土師器	壺	—	—	—			写真撮影20	
119	SH12 墓土下層	赤陶土器	坪	12.1	5.1	4.4	石英主張の砂粒多量		同上・後	
120	SH12 墓土下層	赤陶土器	坪	(12.6)	5.0	4.6	細砂粒		同上・後	
121	SH12-SP8 電内	赤陶土器	高台付坪	—	6.4	—	石英微粒多量		ナゲアケ	
122	SH12 墓土下層	赤陶土器	高台付坪	14.6	6.2	5.5	細砂粒		ナゲアケ	
123	SI15 電内	土師器	坪	11.6	—	—	半透明砂粒			
124	SI15 墓土	須恵器	壺	15.7	—	1.6	白色微粒少量			
125	SI15 電内	須恵器	坪	(15.6)	(9.0)	3.7	黄石・石英微粒少量		同上・後	
126	SI15 電内	須恵器	鉢	(25.2)	—	—	白色微粒少量	同心内丸 ナゲ出し	同上・平行タキ	
127	SI15 電内	土師器	壺	(17.9)	—	—	粗角丸粒少量	ハケ目		
128	SI15 電内	土師器	壺	(16.4)	—	—	細砂粒を含む	ナゲ	ナゲ	
129	SI16 墓土	土師器	坪	—	—	—			側面・周縁部	
130	SI16 墓土	須恵器	壺	—	—	—	白色微粒少量			
131	SI16 墓土	須恵器	壺	(15.9)	—	—	白色微粒少量			
132	SI16 墓土	須恵器	坪	(13.1)	(6.0)	3.5	白色微粒少量		同上・後	
133	SI16 電熱炉室内	漆付土器	高台付坪	(15.6)	6.7	4.8	細砂粒・微粒多量			底部塗地
134	SI16 電熱炉室内	赤陶土器	壺	(13.8)	—	—	砂粒微量(白・青色・赤褐色)			
135	SI17 墓土	須恵器	坪	—	8.8	—	細砂粒多量			
136	SI17 墓土	須恵器	鉢	—	(13.1)	—	灰白色・小颗粒少量		ヘラ削り・タキ	
137	SI18 墓土	土師器	坪	12.8	9.0	4.3	半透明砂粒主張の砂粒やや多い	ミガキ		内側・側板合切
138	SI18 墓土	須恵器	坪	—	—	—	細砂粒		漆器『安』	
139	SI19 墓土	須恵器	坪	(14.4)	(6.4)	3.7	白色微粒少量			
140	SI19 墓土	須恵器	坪	(12.7)	(4.2)	3.8	白色(鉄石?) 砂粒少量			
141	SI19 墓土	須恵器	坪	—	—	—	白色微粒多量			
142	SI19 墓土	赤陶土器	坪	(15.2)	6.8	5.8	暗褐色色粒砂粒少量			
143	SI19 墓土	赤陶土器	坪	(13.2)	5.4	4.6	明赤色色粒少量			
144	SI19 墓土	須恵器	高脚瓶	—	(11.6)	—	稍良、白色微粒			
145	SI19 墓土	土師器	壺	(25.3)	(9.8)	31.3	細砂粒	ハケ目	ハケ目	
146	SE03 電内	土師器	壺	—	8.1	—	砂粒やや多量	ナゲ?	ハケ目	本漆底
147	SE27 墓土	土師器	高台付坪	12.3	5.3	5.0	細砂粒少量	ミガキ		外・側托・内側
148	SE27 墓土	須恵器	坪	(14.7)	(6.0)	4.4	半透明主体の砂粒少量		同上・後	
149	SE29 墓土	須恵器	坪	(13.9)	6.1	4.5	細砂粒少量		同上・後	
150	SE29 墓土	赤陶土器	坪	(16.7)	(5.9)	7.2	半透明主体の砂粒		同上・後	
151	SE30 墓土	須恵器	壺	11.9	—	—	石英砂粒少量			
152	SE30 墓土	須恵器	坪	(14.0)	6.82	3.8	白色微粒			
153	SE33 電内	須恵器	坪	13.9	5.2	4.7	稍良			生漆削合切

表16 遺物観察表(4)

面積 番号	出土地点	種類	形態	計測値			粘土 (鉄・土・石器品は材質と重量(g))	調査枝法	底面調整 その他
				口径	底径	高さ			
				内面	外面				
154	SE37 覆土	灰土器	壺	-	-	-	海綿骨粉多量		
155	SE37 覆土	灰土器	壺	(13.4)	(6.8)	3.4	白色微粒		回転赤堀り
156	SE37 覆土	灰土器	長颈壺	-	-	-	白色微粒		
157	SE38 覆土	灰土器	壺	(13.3)	6.4	4.6	白色微粒少量		内：灰岩の吹き出し
158	SE38 覆土	灰土器	長颈壺	-	8.4	-	石灰砂粒		
159	SE38 壴内	赤陶土器	壺	(26.2)	-	-	粗砂粒		
160	SE38 壴内	赤陶土器	壺	-	-	-	粗砂粒		
161	SH44 覆土	赤陶土器	高台付壺	(14.9)	9.0	6.9	海綿骨粉少量		回転赤堀り
162	SH45 壴内?	赤陶土器	壺	(12.6)	5.1	4.8	石灰共生伴の砂粒少量		回転赤堀り
163	SH50 覆土	赤陶土器	壺	13.6	5.2	4.8	粗砂粒		回転赤堀り、 底面赤堀り、 底面削り
164	SH50 覆土	赤陶土器	壺	13.6	5.3	4.1	粗砂粒		
165	SH50 覆土	赤陶土器	高台付壺	15.2	5.9	5.8	粗砂粒		ナックル
166	SH50 覆土	土罐	壺	(22.7)	-	-	粗砂粒多量		内外：磨耗
167	SB51 覆土	土罐	壺	13.7	-	-	石灰微粒	ミガキ	ハラ削り
168	SB51-SP3 覆土	灰土器	壺	12.8	7.5	3.2	白色微粒		底面下部削り ヘラナブ
169	SB51 球乳	赤陶土器	壺	-	5.0	-	粗砂粒		底面削り
170	SB51 覆土下層	土罐	壺	19.6	-	-			底面: ハラ削り
171	SB51 覆土	土罐	壺	18.1	-	-	粗砂粒		内：磨耗
172	SB53 壴内	土罐	壺	11.8	8.7	11.8	石灰・黄石微粒、海綿骨粉	ナシ	外：世襲アジロ
173	SB07-SP1 覆土	灰土器	壺	14.4	7.0	4.0	白色微粒		回転赤堀り
174	SB09-SP1 覆土	灰土器	高台付壺	14.4	-	-	白色の砂粒		
175	SB09-SP9 覆土	灰陶陶器	長颈瓶	-	-	-	粗良		底面灰垢?
176	SB10-SP12 覆土	灰土器	煙突壺	-	-	-	黄石・石灰砂粒		
177	SB10-SP3 覆土	灰土器	長颈瓶	(8.6)	-	-	長石砂粒、海綿骨粉		
178	SB11-SP1 覆土	赤陶土器	壺	14.0	6.0	3.5	赤褐色色		
179	SB12-SP3 覆土	灰土器	壺	-	-	-	白色微粒少量		逆位的成
180	SB12-SP6 覆土	土罐	壺	13.3	5.5	5.4	粗砂粒	ミガキ	内側、回転赤堀り
181	SB12-SP6 覆土	赤陶土器	壺	14.3	5.3	5.6	赤褐色微分小粒、やや目立つ		
182	SB12-SP6 覆土	赤陶土器	壺	13.0	5.1	4.5	粗良		
183	SB12-SP6 覆土	土罐	壺	(17.5)	-	-	粗砂粒 (石灰・金雲母)		
184	SB13-SP6 覆土	灰土器	壺	13.6	6.0	4.8	粗砂粒少量		回転赤堀り
185	SK02 覆土	灰土器	広口瓶	-	-	-	白色微粒少量		
186	SK02 覆土	灰土器	広口瓶	-	-	-	白色微粒多量		
187	SK02 覆土	灰土器	壺(側)	-	-	-	白色小粒-粒子 (浜土?)		回転ヘラ削り、 回転土削り
188	SK02 覆土	灰土器	壺	-	-	-	白色砂粒、海綿骨粉	円筒アシテ	平行タキ
189	SK02 覆土	灰土器	壺	(54.0)	-	-	白色砂粒 透明微砂粒		
190	SK02 覆土	灰土器	壺	-	-	-	白色微粒少量		
191	SK03 覆土	赤陶土器	高台付壺	14.0	6.2	5.5	暗赤褐色粒子		ナックル
192	SK11 覆土	土罐	壺	(15.4)	7.6	5.6	石灰砂粒板少量	ミガキ	内黒
193	SK15 覆土	灰土器	壺	(18.6)	-	-	粗砂粒少量		
194	SK13 覆土	赤陶土器	高台付壺	(11.8)	(4.8)	2.4	白色微粒少量		回転赤堀り
195	SK14 覆土	灰土器	壺	13.2	6.7	4.6	半透明・透明微砂粒		回転赤堀り
196	SK14 覆土	赤陶土器	壺	(13.0)	5.0	4.8	微砂粒多く赤褐色粒子含む		回転赤堀り
197	SK17 覆土	土罐	高台付壺	11.9	6.0	5.0	石灰共生伴の微粒	ヘラ削り?	ナックル
198	SK20 覆土	土罐	壺	20.2	-	-	赤褐色色	ナシ?	ミガキ
199	SK28 覆土	赤陶土器	壺	14.5	6.2	4.2	暗赤褐色色		
200	SK28 覆土	赤陶土器	高台付壺	(13.6)	-	-	暗赤褐色色		
201	SK28 覆土	土罐	壺	(10.5)	7.1	8.6	海綿骨粉多量(白・半透・透青・灰青)		アジロ
202	SK28 覆土	土罐	壺	(24.2)	(6.0)	32.6	粗砂粒多量		
203	SK29 覆土	赤陶土器	壺	12.5	5.9	4.5	微砂粒・赤褐色・鉄分粒		回転赤堀り
204	SK31 覆土	土罐	耳瓶	8.0	5.8	2.7	微砂粒多量、灰青色色	ヘラミガキ	内黒・蓝色、 内: 黑斑

表17 遺物観察表（5）

図版 番号	出土地点	種類	器種	計測値			鉱土	調査技法		部品調査 その他
				口径	底径	器高		(重・土・石重量)×材質と重量(g)	内面	
205	SK46 離土	土師器	高台付环	13.5	7.2	6.0	白透明微粒少分(赤褐色色鉄)	ハラミガキ	ハラミガキ	内: 黑色
206	SK64 離土	土師器	高台付环	12.2	5.4	5.0	白・灰砂粒、黑雲母			外: 青灰色テクス
207	SK110 離土	鐵器	瓦耳环(14.6)	-	-	-	白色微粒			内: 黄色
208	SK160 離土	鐵器	环	-	6.0	-	白色透明微粒、黑色微粒			塗バッコト、
209	SK185 離土	赤土土器	环	12.6	5.4	5.5	透明・白色微粒少分			回転ホモリ
210	SK196 離土	鐵器	环	13.0	6.8	5.5	白色微粒、青褐色少分(白色鉄は青褐色鉄でない)			回転ホモリ
211	SK196 離土	鐵器	环	14.4	6.0	4.6	白色微粒、海綿骨井			回転ホモリ
212	SK196 離土	鐵器	高台付环	13.0	6.8	5.5	白色微粒			回転ホモリ
213	SK196 離土	赤土土器	环	12.9	5.5	4.4	白色微粒少分			外: 塗装
214	SK196 離土	赤土土器	环	16.0	6.7	6.1	白色軟質大環			回転ホモリ切削
215	SK196 離土	赤土土器	环	17.2	7.6	7.0	織物粒			回転ホモリ
216	SK196 離土	鐵器	环	-	8.9	-	精良			回転ナダ
217	SK196 離土	鐵器	圈	(21.3)	-	-	白色微粒			
218	SK226 離土	鐵器	环	13.4	6.5	3.5	織物粒多量、小颗粒少量			回転ヘラ切削
219	SK380 離土	鐵器	环	13.0	-	-	白色(灰岩?) 粗粒			回転ヘラ切削
220	SK388 風土	鐵器	环	12.9	6	4.4	白・灰・黒・黒色鉄分枝、灰色 織物少分			回転ホモリ
221	SK388 風土	赤土土器	环	13.1	6.2	4.5	白色織物少分			回転ホモリ
222	SK388 風土	鐵器	圈	16.1	-	3.1	白色砂粒。織物や少分			東ねあき痕
223	SK354+123 離土	離土	灰陶脚部	長頸瓶	-	7.8	-	精良		
224	SD065 離土土層	鐵器	环	13.2	5.2	4.2	透明(灰岩?)砂粒、白色微粒			回転ホモリ
225	SD065 離土	鐵器	高台付环	(12.0)	(6.0)	4.7	白色微粒、海綿骨井			静止ホモリ
226	SD065 離土	鐵器	広口瓶	(11.8)	-	-	精良細密			外: 自然形
227	SD065 離土	鉄製品	刀子	長6.4	幅1.2	厚0.4 (336g)				
228	SD065 離土土層	鐵器	高台付环	(13.0)	8.0	4.5	海綿骨井多量			回転ホモリ
229	SP170 離土	鐵器	环	13.2	7.6	3.8	白色砂粒少量			回転ヘラ切削
230	SX12 離土	鐵器	环	14.1	5.8	4.7	織物粒少分			回転ホモリ
231	SX12 離土	鐵器	环	13.4	5.8	4.8	白色微粒少分			回転ホモリ
232	遺跡外 グリッド(E-15b)	土師器	环	15.0	5.6	5.6	灰石・石の微粒		ハラ前彫	底面下付り直理
233	遺跡外 (F-13d) 滑底	土師器	圈	15.0	6.6	2.4	灰石・石の微粒少分			
234	遺跡外 グリッド(DS05)	赤土土器	环	12.9	4.8	4.5	織物粒多量			回転ヘラ切削直理
235	遺跡外 グリッド(E-14)	赤土土器	环	13.3	-	3.6	白色微粒多、白色砂粒少分			回転ホモリ直理
236	遺跡外 グリッド(E-14d)	赤土土器	高台付环	(15.6)	(7.4)	6.8	灰色砂粒無少量			
237	遺跡外 グリッド(E-14d)	赤土土器	环	15.9	7.2	5.8	砂粒少分			操作者
238	遺跡外 グリッド(DS02)	土師器	圈	25.5	-	-	白色(灰岩?)砂粒少分			
239	遺跡外 衣拂	灰陶脚部	鏡	(14.0)	-	-	精良			
240	遺跡外 グリッド(E-14d)	鉄器	环	-	-	-	黒褐色砂粒少分			手持ちヘラナダ
241	遺跡外 グリッド(C-3)	風字鏡	-	-	-	-	白色砂粒少分			手持ちヘラナダ
242	遺跡外 グリッド(B-2)	鏡	-	直径10.9	径6.5	内径2.1				
243	SP58 離土	青銅	鏡	-	4.4	-	精良			
244	SX13 離土	銅鏡	-	-	-	-	(1.15g)			「天蓋宝」
245	SK349 離土	鉄器	环							織物粒直理
246	SX13 離土	赤土土器	高台付环				白色砂粒少分			織物粒直理、 回転ホモリ
247	SX13 離土	鉄器	粗鉢	-	12.9	-	白色微砂粒			

第4章 まとめ

調査の結果、本遺跡は古墳時代及び奈良・平安時代を主体とした集落遺跡であることが判明した。第1節では村山地方で検出例の少ない古墳時代の集落構造と出土遺物について、第2節では奈良・平安時代の集落変遷について述べることとする。

第1節 古墳時代の集落跡について

(1) 壺穴住居跡の構造

本遺跡で検出された古墳時代の壺穴住居跡は、前期が3軒、後期が17軒である。これらの住居跡の平面形・規模・炉と竈・貯蔵穴等についてその特徴を述べていく。

平面形・規模（第96図）

（平面形）主軸方向は凡例に示したように、竈を有する住居跡については竈を通る中心線を、竈を有しない住居跡については長軸方向の軸線を基準とし、座標北に対する傾きを計測した。A類：ほぼ正方形を呈するもの、B類：主軸方向がやや長い方形を呈するもの、C類：主軸方向と直交する一辺がやや長い方形を呈するもの、以上の3類に大別される。前期はおおよそA類に属する。後期はA類が2軒、B類が10軒、C類が2軒で、B類が最も多い。

（規模）前期S I 2の $6.18 \times 6.01\text{m}$ （床面積 37.1m^2 ）を最大とし、後期S I 4の $4.04 \times 3.14\text{m}$ （床面積 12.7m^2 ）を最小とする。床面積が 30m^2 以上の大形、 $20\sim 30\text{m}^2$ の中形、 $10\sim 20\text{m}^2$ 未満の小形の3類に大別される。中形が最も多く、小形は後期のみに見られるという傾向がある。

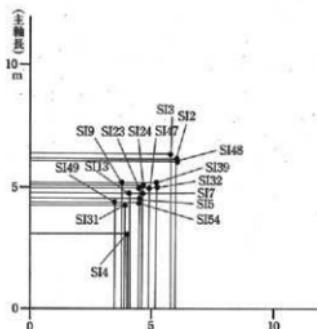
主軸方向（第97図）

前期は、S I 7と47が北東方向に主軸をとる。後期では、ほとんどの住居跡が北東に主軸をとる傾向が窺える。北東以外では、東南東にとるもののが1軒、北西にとるもののが2軒確認されている。

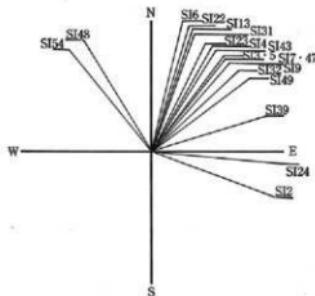
炉・竈（第98図）

明確に炉・竈を有すると判断できる住居跡は、20軒中、炉を有するものが2軒（S I 7・47）、竈を有するものが9軒（S I 3・4・5・6・13・23・24・39・54）である。

炉は、前期の住居跡に認められる。S I 7・47ともに住居跡の中央部やや西寄りの位置に、



第96図 古墳時代住居跡の規模



第97図 古墳時代住居跡の主軸方位

床面を若干掘り窪め楕円形を呈する地床炉を設ける。また、SI2では炉の痕跡は確認できなかったが、住居跡中央部に炭化物の堆積が認められ、恐らくこの場所に炉があったものと考えられる。

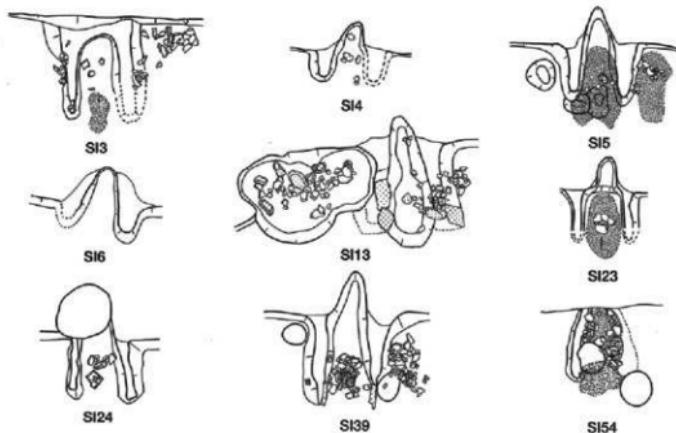
竈は、後期の住居跡に認められる。北東壁もしくは北壁に付設されることが多く、9軒中6軒(SI3・4・5・6・13・23)がこの位置をとる。位置は、壁の中央部及び、中央部やや東寄りに付設される。東壁は2軒(SI24・39)で、中央部及び中央部やや北寄りに付設される。北西壁は1軒(SI54)で、中央部やや東寄りに付設される。竈の付設される方向は、南を除いた各方向に付設され、北が一番多いことが分かる。位置は、竈を正面に見て、中央部や右寄りであることが多い。

煙道は、壁外へ削り込まないもの(SI3)、やや壁外へ削り込むもの(SI4・5・6・13・23・24・39・54)に大別される。煙道の立ち上がりは、ほぼ垂直に立ち上がるものと、やや傾いて立ち上がるものが確認される。SI39のみ、例外的に緩やかに立ち上がっている。形態は、燃焼部から煙道にかけて、袖内側のラインと一連となり、なだらかに削り込んで作られているものが主体となる。

袖は、本遺跡では全て、にぶい黄褐色系の粘質土により構築されている。これに多量の微砂を混ぜるもの(SI4・5・24)、微砂に加えて炭化物・焼土を混ぜるもの(SI39・54)が確認されている。袖石が遺存しているのは3軒(SI3・13・39)で、石材は全て凝灰岩である。

支脚は、5軒の住居跡に遺存している。位置は、4軒が燃焼部中央(SI4・13・23・24)、1軒が中央部や左寄り(SI39)である。石材は全て輝石安山岩である。

火床部の位置が確認できたのは5軒(SI3・5・23・39・54)である。SI3は焚口から焚口寄りの燃焼部にかけて、SI5・23は焚口の約20~30cm外側から燃焼部にかけて、SI39は燃焼部の支脚手前が直径約22cmの円形に、SI54では燃焼部から煙道にかけて認められた。



第98図 古墳時代住居跡竈の形態

住居内施設（柱穴・貯蔵穴・出入り口ピット・周溝）

（柱穴）床面と住居内施設の覆土が酷似しているため確認は困難を極めた。柱穴が明瞭に確認できたのは S I 2・9・32・39・49 の 5 軒のみである。前期の S I 2 では、住居跡のほぼ対角線上に 4ヶ所配置する 4 本主柱構造が確認された。後期では、S I 39 が住居跡のほぼ対角線上に 4ヶ所配置する 4 本主柱構造、S I 32 が住居跡の対角線上からやや外れた場所に 6ヶ所配置する 6 本主柱構造、S I 9・49 が住居跡の短軸方向の両壁中央部に 2ヶ所配置する 2 本主柱構造である。4 本主柱構造が明確に確認された住居跡は S I 39 のみであるが、その他の住居跡についても、4 本主柱構造の可能性があることを考慮に入れたい。2 本主柱構造は炉・竈ともに付設しない長方形の住居跡に伴うものと考えられる。

（貯蔵穴）円形及び楕円形を呈するものを主体とし、その他隅丸長方形を呈するものが 2 基確認される。深さは、30~40cm 代のやや深いものも確認されるが、ほとんどが平均 16cm の浅いものである。全体的には円形で浅いという傾向が見られる。位置は、前期が住居跡のコーナー部に、後期は竈の脇及び、竈と対面する壁のコーナー部に確認される。竈を正面に見て右側に配されることがほとんどで、左側に配されるのは S I 24 のみである。

（出入り口ピット）前期は、S I 2 が壁中央部の直下で検出される。後期は竈を持つものは、竈の対面及び、竈右側の壁中央部からやや竈寄りで検出される。竈を持たないものは、長軸方向の壁中央部から検出される。ほとんどが壁直下に作られる。S I 3 は完掘の状態では内側に入っているが、小溝を住居の建替えの痕跡と考えると、一回り小さい住居跡の壁直下と捉えることができる。

（周溝）周溝は確認できないものが多く、S I 23 に確認されるのみである。

以上、住居跡の構造について個別に述べてきたが、これらを炉・竈の形態を基準に、貯蔵穴・出入り口ピットの位置関係を勘案して見ていくと、大きく前期と後期の 2 群に分かれ、それぞれ前期は 2 類、後期は 4 類に細分することができる。（第99図）

I - 1 類：前期。ほぼ中央に炉を作り、炉の正面の南西壁中央直下に出入り口ピットが配される。4 本主柱構造。貯蔵穴は持たない。S I 2 が相当する。

I - 2 類：前期。炉は住居跡中央部やや西寄りに作られ、南の角に貯蔵穴が配される。出入り口ピットは検出されなかったが、同時期の関東における住居跡の例から、貯蔵穴の北、東壁の炉正面が出入り口場所となっていたと推測される。S I 7・47 がこれに相当する。

II - 1 類：後期。煙道を壁外に削り込む竈を有する住居跡である。北西壁中央部に付設される。竈の右脇に貯蔵穴を持ち、竈正面の壁際に出入り口ピットを持つ。おそらく 4 本主柱構造となる。S I 3 が相当する。

II - 2 類：後期。煙道を壁外へ削り込む竈を有する住居跡である。北東壁中央部やや東寄りに付設される。竈正面の壁際に出入り口ピットを配し、その右のコーナー部に貯蔵穴を配するタイプである。S I 23 が相当する。

II - 3 類：後期。同じく煙道を壁外へ削り込む竈を有する住居跡である。竈の右脇に貯蔵穴を持ち、同じく右側の壁際、中央部やや貯蔵穴寄りに出入り口ピットを配するものである。4 本

主柱構造となる。当遺跡における古墳時代後期の住居跡の典型と考えられる。S I 4・5・6・13・24・39・54がこれに相当する。竈の付設位置は、東壁ほぼ中央、北西壁中央部やや東寄り、北東壁中央部やや東寄り、東壁北寄り、北壁中央と様々である。敢えて言えば、北東壁中央部やや東寄りが3軒と多く、他は各1軒である。大きく南北方向で分けると、北壁に付設することが多いようである。S I 24は貯蔵穴の位置が逆であるが、竈の脇に配置するというバリエーションの中に収まると理解できるため、この類に入れることとした。S I 5は逆にS I 39と同様の場所に出入り口ピットは確認できるものの、貯蔵穴は確認されなかった。

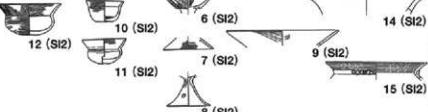
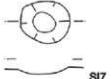
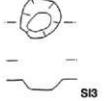
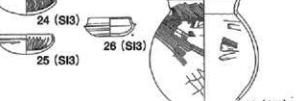
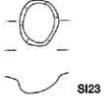
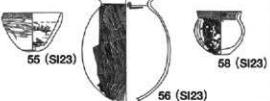
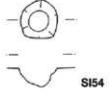
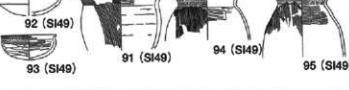
II - 4類：後期。竈・炉ともに持たない住居である。S I 9・49が相当する。2本主柱構造となり、S I 49は北西壁中央に出入り口ピットを持つ。長方形を呈し、規模はやや小形～中形である。

以上のように、前期で2類、後期で4類に分けることができたが、それぞれの時期差は、遺物上からはほとんど差異がなく、住居跡の構造のみで時期的な変遷を辿るのは困難である。県内の他遺跡と比較すると、前期では、I - 1類は白鷹町廻り屋遺跡S T 16、I - 2類は山形市今塚遺跡S T 7・S T 702・S T 711、白鷹町廻り屋遺跡S T 14等で類例が確認される。後期では、II - 1類は山形市下柳A遺跡S T 2がおそらく同タイプであると考えられる。II - 2・3類は中山町三軒屋物見台遺跡に類似したものが確認できるが、時期が6世紀前半に比定されており、本遺構よりやや新しくなる。II - 4類は、山形市下柳A遺跡S I 6に長方形を呈する住居跡が確認される。但し、本類とは異なり、中央に焼土跡が認められ、炉の可能性が提示されている。全体的に検出例が少なく、今後の資料の増加を待ってさらに詳しい検討を加える必要がある。

(2) 出土遺物

前期の土器は、ほぼ今塚遺跡と同時期の前期後半～末葉前後の時期のものと思われ、小形壺と小形器台、中形の直口壺、中実柱状高壺、口縁外反鉢等に共通する特徴が見られた。細かく見ると前期の3軒の住居（S I 2・7・47）それぞれに共通して出土している口縁部の外反する鉢には形状差が見られる。S I 7の鉢は、前期末から中期初頭段階とされる栃木県の花の木町遺跡出土のものに形態が類似しており、前期でもより新しい時期のものと推測される。花の木町遺跡からは中実柱状の高壺が出土しており、本遺跡S I 47出土の中実柱状高壺と比較するとS I 47のものよりは新しいようである。S I 47の口縁外反鉢は体部形状ではS I 2に近いが、口縁部はS I 2のもののように外反していない。S I 2出土の壺口縁部は端部に面取りを行っており、古い特徴と見られる。S I 47の台付鉢は組成的にさらに古いものと組合う傾向があるが破片であり古いものが混入している可能性が考えられる。よってこの3軒の中ではS I 2→S I 47→S I 7という順に廃絶している可能性が推測される。従って住居跡の構造分類のI - 1類はI - 2類よりも古い可能性がある。

後期の土器は、最も軒数の多いII - 3類の住居跡をはじめとして、II - 1類、II - 2類のものもほぼ一時期のまとまりの中に収まると見られる。II - 3類の中でわずかにS I 24にやや古い傾向が見られる壺があり、II - 2類のS I 23の小形壺にやや新しい傾向が見られる程度である。

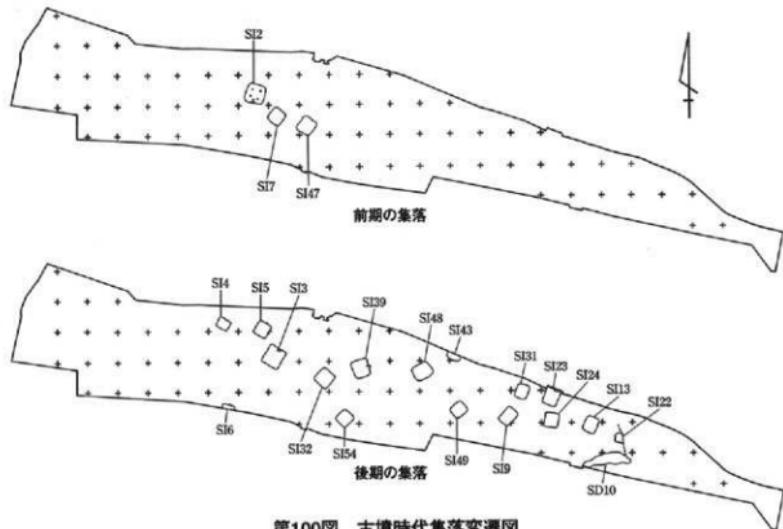
	住居跡平面形	竈	貯蔵穴	出土遺物
I 1類				
I 2類				
II 1類				
II 2類				
II 3類				
II 4類				
				

※▲出入口の方向(出入口ピットの位置、推定も含む)

第99図 古墳時代住居跡の構造

よってII-1類のS I 3出土の須恵器坏に代表される時期にはほとんどの住居跡は集約されるものと思われる。

本遺跡の後期の住居跡の時期を考える上で参考になるのは須恵器である。住居跡から出土しているものでは、S I 3出土の須恵器坏がT K 47~MT 15古段階頃の時期のものと思われる。その他に造構外の小片で実測掲載していないものを含めると11個体が出土している。内訳は竈・高坏・瓶類2個体・壺4個体・坏もしくは蓋・蓋もしくは無蓋高坏2個体である。109の竈は口縁部の小片で波状文は細かく頸部が直立し形態的にT K 47頃のものと思われ、胎土が灰白色で猿投産の可能性がある。110の壺口縁部片はT K 208~T K 23の口縁部形態と類似し、細かく丁寧な波状文や体部破片内面のアテ痕が丁寧にスリ消されていること等から、T K 47段階のものよりも少し古い特徴を持っていると考えられる。111の壺の口縁部も波状文の細かさや焼成の良さはやや古い要素と思われる。高坏片はやや小振りな無蓋高坏になるものと思われる。瓶類としたものはカキ目の施された提瓶の可能性のある個体で胎土に砂粒を含んでいる。灰褐色の胎土に草緑色の自然釉の掛かった壺体部片もあり、東海地方猿投産の胎土に類似している。坏底部あるいは、蓋天井部と思われる小破片は、外面に回転ヘラ削りの入った個体で胎土に海綿骨針を多量に含んでいる。蓋あるいは無蓋高坏と思われる2個体は外面の突線がやや甘く、T K 47段階の坏蓋としては口縁部が「ハ」の字状に外側に開き過ぎており、6世紀代の坏蓋が無蓋高坏になるものと思われる。以上本遺跡の古墳時代の須恵器は、海綿骨針や砂粒を含む胎土のもの以外は猿投産のものや陶邑産を主体とするものと見られ、おそらくT K 23段階頃から搬入が始まり、T K 47段階を主体とし、提瓶器種の存在から見て6世紀に入ても僅か



第100図 古墳時代集落変遷図

に使用されていたものである。よって後期の集落の時期は陶邑編年TK47を中心になしながら、その前後のTK23やMT15段階に僅かにかかる時期のものと思われる。

以上のように古墳時代後期の集落の時期をほぼTK47段階を中心とした時期として考えた場合、最も軒数の多かったII-3類のタイプの住居跡構造について再度特徴を整理し、他遺跡の遺構・遺物との比較を行って結びとする。

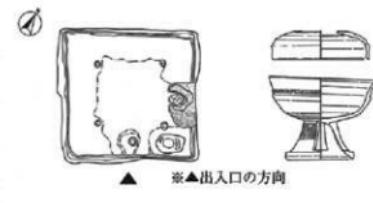
(3) 小結

II-3類とした竪穴住居跡構造の最大の特徴は、通常出入り口ピット対面に炉や竈が設けられるのに対して、出入り口ピット側から入ってすぐ右か左側に貯蔵穴と竈が付設される構造である点である。この構造のものは関東平野の

5世紀末頃の初期竈を持った集落遺跡でいくつか見られる。須恵器を伴う例も多く茨城県阿見町星合遺跡、同江戸崎町樋の台遺跡はその典型的な例であり、両遺跡ともTK47段階頃の須恵器が多く出土している。星合遺跡・樋の台遺跡では竈構造上で火床面の構築の際床面を掘り込みむしろ床にロームを敷いて壁に向かって傾斜した火床面をつくる点（樋村1995）も特徴的である。

山形市下柳A遺跡はST2-ST15からTK208-TK23頃の須恵器竈が出土し、遺構外からも同じ時期の壺・蓋が出土している。土師器高杯も短脚化前の器形であり、TK208-TK23段階頃の遺跡と思われる。本遺跡の竪穴住居跡のII-1類とII-4類は下柳A遺跡の遺構との類似が見られ本遺跡の中心時期よりやや古い段階の遺構の可能性がある。

中山町三軒屋物見台遺跡は、前期や中期の竪穴住居跡が検出されているものの主体は後期の集落跡である。ST1・5・13からMT15段階の壺・竈が出土し、SD15からは古い様相のある壺を除くと、MT15を主体としてTK47-TK10の範疇で捉えられる壺・竈が出土している。土師器壺についても口縁の外反する形態のものが主体となっている点等から、6世紀前葉を中心とする集落遺跡と見られる。竈の煙道部の削り込みや出入り口と竈の位置関係等で、本遺跡と共に特徴を持つ竪穴住居跡もあり、後期の集落としては三軒屋物見台遺跡の古い段階と本遺跡は重なる時期があるようである。



樋の台遺跡10号住居跡・同出土遺物

第2節 奈良・平安時代の集落跡について

奈良・平安時代の集落跡は竪穴住居跡と掘立柱建物跡によって構成される。遺構の形態と出土遺物とを勘案しながら、集落の変遷と性格について検討していく。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は26軒検出された。出土遺物から8世紀代～10世紀前半に位置付けられる。

8世紀代は5軒（S I 15・17・41・46・51）が検出された。S I 15・17のように床面積が20～30m²の中形で煙道を長く壁外へ削り込む竈を有するものと、S I 41・46・51のように床面積が30m²以上の大形のものとが確認される。両者とも4本主柱構造で周溝を持つ。大形のものは、検出されなかったものの、竈を有する可能性がある。貯蔵穴は、S I 17で竈を正面に見て右脇の土坑がこれに想定される。出入り口ピットはS I 51で南壁中央に確認されている。

9世紀前半は2軒（S I 10・30）が検出された。中形で、遺存していないが北竈が付設されていた可能性がある。周溝が一部で確認される。

9世紀後半は7軒（S I 16・18・19・27・29・37・55）が検出された。S I 16・29・37のように中形で煙道をやや壁外へ削り込む竈を有するものと、S I 19・27のように小形で南竈を有するものとが確認された。南竈は、S I 19のように煙道をやや削り込むものと、S I 27のように長く削り込むものがある。煙道の長い竈は8世紀代のS I 15でも確認され、住居跡の平面形がS I 27同様に台形を呈する特徴が見られる。S I 55については、出土遺物から9世紀後半に廃絶したと考えられるが、8世紀代のS I 51と同様な規模・構造が認められ、住居が構築された時期は古くなる可能性がある。

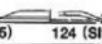
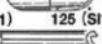
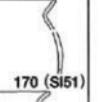
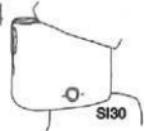
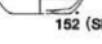
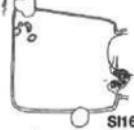
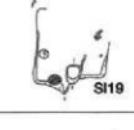
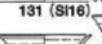
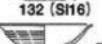
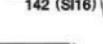
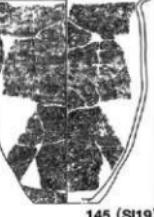
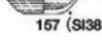
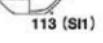
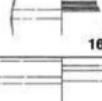
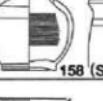
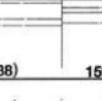
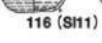
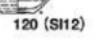
10世紀初頭は4軒（S I 1・38・45・53）が検出された。床面積が10m²以下と、前段階よりもさらに小形化する。竈は、S I 38の東竈を除き南竈となる。形態はこれまで同様、煙道をやや壁外へ削り込むものが主体であるが、S I 53は煙道を壁外へ削り込まない。

10世紀前半は6軒（S I 11・12・33・44・50・52）が検出された。S I 12・33・44のように小形では正方形を呈するものと、S I 11・50・52のように中形で長方形を呈するものとの大きさ2種類が確認される。前者は南竈を有する可能性がある。後者はS I 11・52に見られるように、北壁に煙道を壁外へ削り込む竈を付設し、周溝を持ち、4本主柱構造となる。

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は10棟検出された。棟方向・柱掘形形状・重複関係・出土遺物等から判断すると3類に分けられる。

A類は、棟方向が東へ90°以上振れる側柱式の東西棟建物（S B 1・10）である。規模はS B 1が5×3間（床面積75.2m²）、S B 10が5×2間（床面積68.9m²）と大形である。柱掘形は北側の棟方向が、長軸1mを超える大形で隅丸方形を呈すものを主体とし、南側が北よりやや小形で円形を呈すものを主体とする傾向が見られる。柱間寸法も1尺を約0.3mで計算した場合、7尺～9尺となり長くなる。またS B 10は、その周囲をS D 5が「コ」の字状に廻り、建物を区画する役割を果たしていたと考えられる。遺物はS B 10・S D 5から9世紀代の須恵器が出土している。

住居跡平面形		出土遺物
I期	 SI15  SI51	 123 (SI15)  124 (SI15)  167 (SI51)  125 (SI15)  170 (SI51)  126 (SI15)  171 (SI51)
II期	 SI30	 151 (SI30)  152 (SI30)
III期	 SI16  SI19  SI27	 130 (SI16)  133 (SI16)  131 (SI16)  132 (SI16)  139 (SI19)  142 (SI16)  147 (SI27)  134 (SI16)  145 (SI19)
IV期	 SI1  SI53  SI38	 157 (SI38)  113 (SI1)  160 (SI38)  158 (SI38)  159 (SI38)
V期	 SI12  SI11  SI52	 116 (SI11)  120 (SI12)  119 (SI12)  121 (SI12)  122 (SI12)

第101図 奈良・平安時代住居跡の構造

B類は、棟方向が西へ3~5°振れる側柱式の南北棟建物（SB7・16・17）である。規模は3×2間（床面積23.9m²）と2×2間（床面積17.6m²、10.8m²）である。柱掘形は円形もしくは楕円形を呈し、A類に比べ小形である。柱間寸法は6・7尺を基本とするが、SB17では小さく、一部5尺となる。遺物はSB7から9世紀前半の須恵器が出土している。

C類は、棟方向が東へ1~8°振れる側柱式の南北棟建物（SB4・9・11・12・13）である。規模は、3×2間（床面積26.5~36.7m²）と2×2間（床面積18.9m²）である。柱掘形はB類と同様である。柱間寸法は7・8尺を基本とするが、SB12のみ一部9・10尺を用いている。遺物はSB9・11・13から9世紀後半の須恵器・灰釉陶器が出土している。

（3）集落変遷

以上、竪穴住居跡・掘立柱建物跡を個別に概略してきた。これに出土遺物を加えて勘案すると、5期の変遷が認められる。

I期は、8世紀代の竪穴住居跡により構成された集落である。調査区の中央から東側にかけて、ほぼ東西方向に並ぶように住居跡が5軒配置され、規則性が見える。

II期は、9世紀前半の竪穴住居跡とA・B類の掘立柱建物跡により構成された集落である。調査区中央に大形の東西棟建物跡が2棟（内1棟は区画溝を伴う）、棟方向が西に傾く南北棟建物跡が3棟、その南東に住居跡が2軒配置される。掘立柱建物跡を主体とした集落と考えられる。各遺構の出土遺物から9世紀前半に比定されるが、山形県埋蔵文化財センター調査（1999）の一ノ坪遺跡の成果と比較すると、方形でやや大形の柱掘形を持つ掘立柱建物跡は8世紀後葉～9世紀初頭に比定されており、同形態であるSB1・10については、8世紀後半に構築されていた可能性もある。

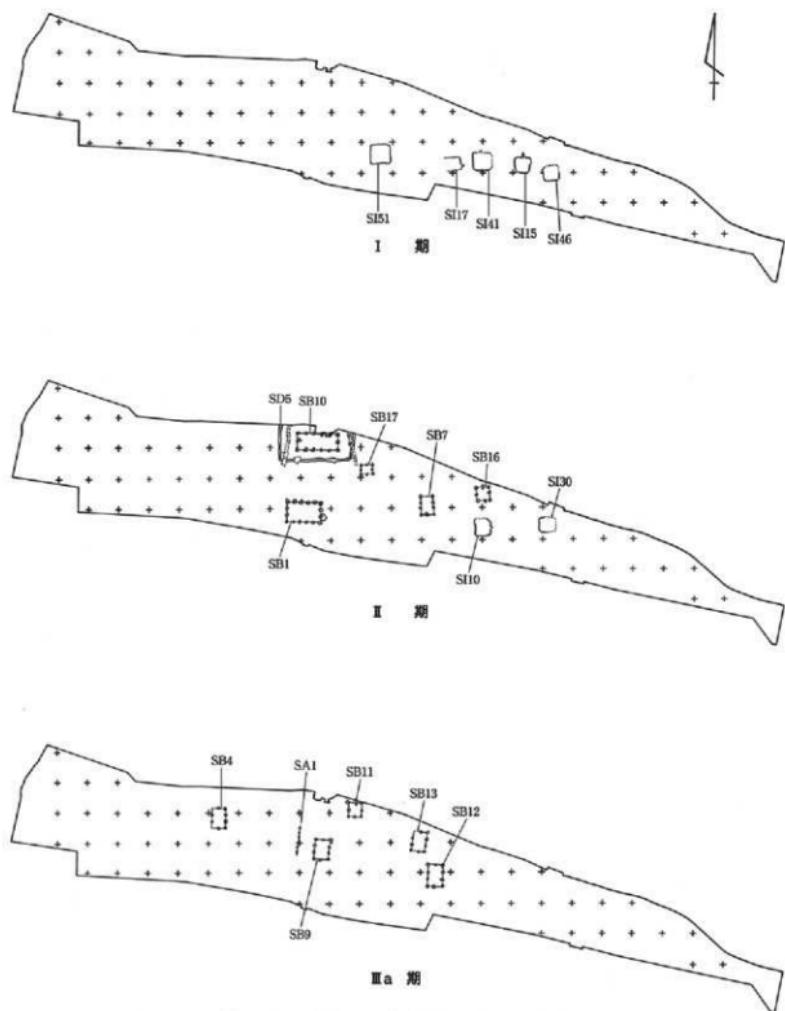
III期は、出土遺物と遺構の切り合い（SB7と12、SD5とSB11）により、9世紀後半に位置付けられる。9世紀後半の竪穴住居跡とC類の掘立柱建物跡により構成される集落であるが、SI37がSB12・13を切っていることから掘立柱建物跡群の集落（a）と竪穴住居跡群（b）の集落に細分した。IIIa期は、調査区中央から西側にかけて、棟方向が東に傾く南北棟建物跡が5棟、横列1条が配置される。IIIb期は、調査区中央から東側にかけて住居跡が6軒配置される。住居跡は、小形で南竈を有する住居跡が確認され始める。

IV期は、10世紀初頭の竪穴住居跡により構成された集落である。調査区中央から西側にかけて4軒が配置される。住居跡は全て小形化し、南竈を主体とする。

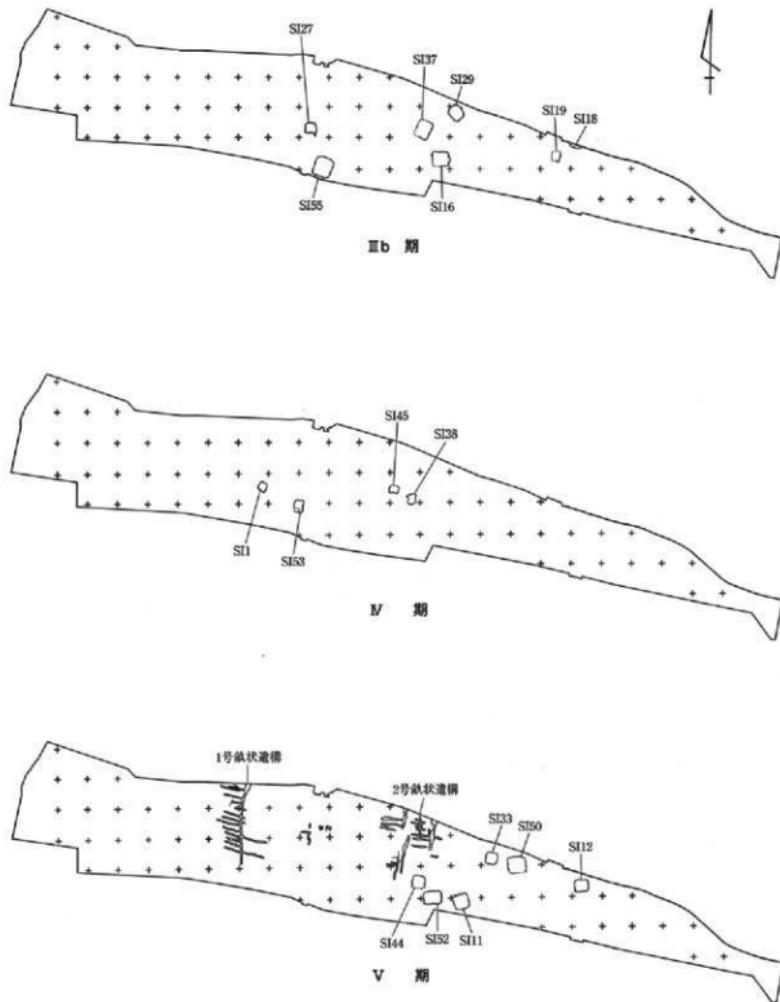
V期は、10世紀前半の竪穴住居跡と畝状遺構により構成された集落である。調査区中央から東側にかけて竪穴住居跡が6軒、西側には畝状遺構が2群配置され、居住域と生産域とが分けられている。畝状遺構は出土遺物からは時期が判断できないが、I～IV期までの遺構と切りあうこと、畝の方向が10世紀前半の住居跡とほぼ平行であることから本期に相当すると判断した。また、本遺跡出土の炭化米とこの畝状遺構との関連性は無い。

このように概観していくと、I～IIIa期の掘立柱建物跡を中心とする集落は、建物跡の規模や柱掘形の形状、さらに漆書文書・墨書・刻書土器、風字硯が出土していること等を勘案して、公的な性格を持っていたのではないかと考えられる。IIIb期から後は掘立柱建物跡が消滅し、

竪穴住居跡を主体とする集落となり、一般村落的な性格をもつようになると考えられる。このように、9世紀後半のⅢa期とⅢb期の間に本遺跡では大きな社会的変化があったと考えられる。



第102図 奈良・平安時代集落変遷図（1）



第103図 奈良・平安時代集落変遷図（2）

参考文献

- 青山博嗣 1969「古墳時代中～後期の土器編年～福島県中通り地方南部を中心に～」『福島考古』第40号 福島考古学会
- 阿部明彦・渡辺 嘉 1998「山形県遊佐町大坪遺跡におけるSG1河川跡F-4G地点出土土器について」『山形考古』第6巻第2号 山形考古学会
- 石井由佳 1993「資料紹介 東根市蟹沢遺跡採集の土器(1)」『山形考古』第5巻第1号 山形考古学会
- 茨木光裕 1989「山形盆地における須恵器生産の開始とその展開」『山形考古』第4巻第3号 山形考古学会
- 茨木光裕 1999「大塚天神古墳出土の地輪について」『山形考古学会第52回研究大会資料』 山形考古学会
- 植松英慶 1997「庄内高麗川と月光川流域の平安時代の集落変遷について」『山形考古』第6巻第1号 山形考古学会
- 小野 忍 1978「山形県における須恵器生産の開始－木和田窑跡出土の須恵器を中心として－」『山形考古』第2巻第3号 山形考古学会
- 桜井実行 1995「茨城県における初期の標柱」『みちのく発掘』－晉言文庫先史遺跡記念論集－
- 川崎利央 1978「平安初期の坏型土器について－山形盆地内出土の二・三の資料を中心として－」『山形考古』第2巻第3号 山形考古学会
- 川崎利央 1999「出羽南半における律令制成立時の土器標柱」『山形考古』第6巻第3号 山形考古学会
- 古代城柵官道跡検討会 1999「第25回古代城柵官道跡検討会資料」第25回古代城柵官道跡検討会事務局
- 佐藤庄一 1978「山形県における縄文時代最末期の土器標柱」『山形考古』第2巻 第3号 山形考古学会
- 佐藤庄一 1999「山形県の古墳時代高麗～4～6世紀の遺物分布・土器・集落－」『山形考古学会第52回研究大会資料』 山形考古学会
- 佐藤庄一 2000「第26回例会報告要旨 宮城の古代集落」『考古学の方法 東北大文学部考古学研究会会報』第3号 東北大文学部考古学研究会
- 舟木良仁 1996「山形県白鹿町越里遺跡S-T14住居跡出土の古式土器類」『山形考古』第5巻第4号 山形考古学会
- 辻 秀人 1963「東北南部の古墳出現期の標柱」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会1993年度新潟大会
- 中村五郎 1988「弥生文化の曙光」 未来社
- 幸良枝子 2000「第29回例会報告要旨 宮城の古代集落」『考古学の方法 東北大文学部考古学研究会会報』第3号 東北大文学部考古学研究会
- 村山正市 1969「山形県上山西部丘陵窯跡群の一考察」『山形考古』第4巻第3号 山形考古学会
- 山形県 1969「山形県史 資料11篇 考古資料」
- 山形県教育委員会 1979「山形西高萩地内道跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第17集
- 山形県教育委員会 1984「境田C-1・D道跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第76集
- 山形県教育委員会 1984「県正確遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第81集
- 山形県教育委員会 1985「お花山古墳群発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第85集
- 山形県教育委員会 1985「山形西高萩地内道跡第3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第91集
- 山形県教育委員会 1986「三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(1)」山形県埋蔵文化財調査報告書第106集
- 山形県教育委員会 1987「三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(2) -本文書-」山形県埋蔵文化財調査報告書第107集
- 山形県教育委員会 1987「三軒屋物見台遺跡第4次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第173集
- 山形県教育委員会 1992「山形西高萩地内道跡第4次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第173集
- 山形県の古代文字資料を考える会 1998「山形県内外の古代文字資料集成」
- 山形県埋蔵文化財センター 1994「今坂遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集
- 山形県埋蔵文化財センター 1995「畠田遺跡・中野遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第22集
- 山形県埋蔵文化財センター 1995「大坪遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第23集
- 山形県埋蔵文化財センター 1996「福り屋遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第27集
- 山形県埋蔵文化財センター 1996「下新A遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第32集
- 山形県埋蔵文化財センター 1997「北柳1・2遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
- 山形県埋蔵文化財センター 1998「平野古窯跡群第12地點道跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集
- 山形県埋蔵文化財センター 1998「北川長田遺跡第3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第56集
- 山形県埋蔵文化財センター 1998「津田長井遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第58集
- 山形県埋蔵文化財センター 2000「中地遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第77集
- 山形市 1968「山形市史 別巻1 窯遺跡」
- 山形市教育委員会 1995「馬上古窯跡発掘調査報告書」
- 米沢市教育委員会 1993「大瀧A遺跡発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第36集

附 章

第1節 漆紙文書について

一ノ坪遺跡出土漆紙文書

東京大学大学院 新井重行

一 概要

この漆紙文書は、平成12年度の調査でSK-160の覆土中より、須恵器坏の底部に付着した状態で出土した。須恵器は口縁部を欠損しており、口径は不明である。底径は6.0cmである。現状では、漆紙は固まった漆と一体となっており、漆紙だけを分離させることはできない。漆を含めた残存法量は長径8.4cm、短径5.9cmである。当文書は文書の廃棄後に、漆のバレットとして使用した土器の蓋紙として再利用されたものである。

二 漆紙文書について

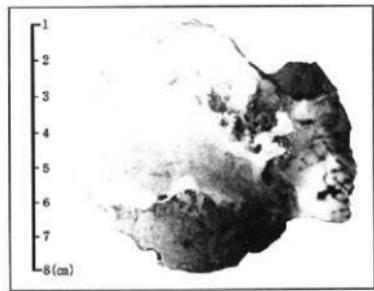
オモテ面中央部には土砂が付着している部分があり、この部分は赤外線カメラを使用しても文字は確認できなかった。また、オモテ面の一部に漆がみえる。これは、何らかの理由によって、上面から圧力が加わり（いつの時点かは不明）漆が蓋紙の上にまわり込んでしまったものと考えられる。

文字が確認できたのは右端のごく一部と左端の一部であるが（図版参照）文字の残りは悪く、判読はできなかった。文書の向きについては行が揃うということを考慮して、現段階では、図のように考えておく。すなわち、現状で確認できる文字は左文字であり、漆付着面に書かれている文字ということになる。

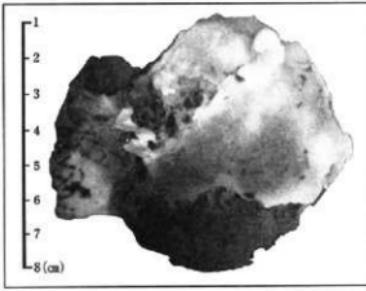
オモテ面については、水で濡らす等の方法で観察したが、文字は認められなかった。また、界線・合点等も確認できなかった。

三 釈文

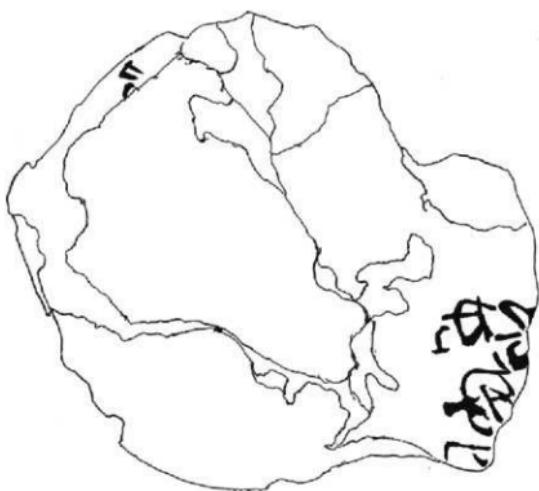
二行分、合計四文字が確認されたが、それぞれの文字が一部を欠いており、
判読するに至らなかった。文字の幅は約1.2cmである。行数・行幅は不明である。



正 位



裏 焼 き



正 位



裏 焼 き

(写真よりトレース)

第2節 古墳時代住居跡出土の炭化米分析

一ノ坪遺跡出土種子のDNA分析

佐藤洋一郎（静岡大学農学部）・株式会社 古環境研究所
 山形市・一ノ坪遺跡からは古墳時代から古代にかけての堅穴住居が49軒出土しているが、そのうち古墳時代後期のものと思われる2軒の住居から炭化したイネ種子（玄米の状態）が出土している。今回はこれらイネ種子のDNA分析の結果について述べる。なおここでは以降、炭化したイネ種子のことを炭化米と称することとする。

分析材料

分析に使用した試料は以下の通りである（表1を参照）。

① S I 4から出土したもの。S I 4は遺跡西地区の住居址である。

この住居址から出土した炭化米から14サンプルを分析に用いた。14サンプルのうち、サンプル1から6までの6サンプルは各1粒づつの炭化米からなっている。またサンプル7から14までの8サンプルについては複数の炭化米を混ぜて抽出する方法を用いた。この方法は、乾燥など埋蔵中の条件が悪くDNAの抽出が困難と思われるサンプルに適用して好成績をあげている。

② S I 13から出土したもの。S I 13は遺跡北東よりの住居址である。

ここで出土した炭化米からも同じく14サンプルを供試した。各サンプルの粒数は表1のとおりである。

DNA分析の方法

DNAの抽出は炭化米からDNAを抽出するために開発した方法（改変したアルカリSDS法）を用いた。抽出の精度を高め、また外からのDNAの誤混入を防ぐため、今回はこの方法に、以下に示すような改良を加えた。その概略を示す。

まず炭化米をサンプルごとに水でよく洗いさらに70%から90%のエタノールで洗った上、1.5mlの専用チューブに入れる。これに滅菌した金属製ビーズを入れ、チューブごと液体窒素に漬けて凍らせた上でマルチビーズショッカーという攪拌機にかけて炭化米を凍結粉碎する。チューブにDNAを保護する緩衝液を加え、金属製ビーズを取り出した後に0°Cで20分間、15000回転の遠心分離を行う。ここから先は中村らの記す方法とまったく同じである。

抽出したDNAは、ジャボニカの2つの品種群である温帯ジャボニカと熱帯ジャボニカを区別する2セットのプライマーによってPCR增幅させた。PCR增幅とは、DNA合成酵素の活性を利用して、DNAの特定の部分だけを増幅させる実験手法である。プライマーとはDNAの増幅にあたり、その始点と終点を決めるごく短いDNA断片である。遺物に残されたDNAはごく微量であるため、PCR法以外の方法はまだ開発されていない。

本分析では、サンプルがジャボニカであることを前提として、それが温帯ジャボニカか熱帯ジャボニカかを判別するDNAの領域を増幅させた。

分析の結果とそれに対する考察

今回の分析では定法によって分析を進めたにもかかわらずDNAの増幅が困難であり安定した

結果を得ることができなかった。そこで急速、使用するテンプレートDNA（炭化米から抽出されたオリジナルのDNAを含む液）の量を2倍にする改良を加えたところ安定したバンドを得ることができた。

また実験に先立ち、典型的な温帯ジャボニカ品種（J1）および熱帯ジャボニカ品種（LL8C）から得たDNAをテンプレートにしてPCR增幅させた産物の電気泳動パターンをあらかじめ調査した。それぞれの電気泳動像は写真に示す。品種J1は「坊主5号」と呼ばれる北海道の在来品種、またLL8Cはラオス・ルアンパバーン近郊の村で採集した熱帯ジャボニカ品種である。

① S I 4 から出土した炭化米について

S I 4 から出土した炭化米サンプルのうち、サンプル8からはJ1と同じ、温帯ジャボニカに固有のバンドが得られた。サンプル8は5粒の種子を混ぜたサンプルであり、おそらくこの5粒の中に温帯ジャボニカの種子が含まれていたものと考えられる。また2粒の種子を混成して得たサンプル（サンプル11）からは、熱帯ジャボニカに固有のバンドが得られた。この2粒のいずれかまたは両方が熱帯ジャボニカであった可能性が高い。こうしたことから、住居S I 4におかれていった米が熱帯ジャボニカと温帯ジャボニカの混成物であったとの可能性が指摘できる。

② S I 13 から出土した炭化米について

S I 13 から出土した炭化米についても同様のことが指摘できる。まず1粒から抽出したサンプル20からは温帯ジャボニカに固有のバンドと熱帯ジャボニカに固有のバンドとが検出された。これはサンプル20が両者の雑種であったことを強く示唆する。また5粒を混ぜたサンプル22およびサンプル24からは、それぞれ温帯ジャボニカ、熱帯ジャボニカに固有のバンドが検出された。この住居址にも温帯ジャボニカと熱帯ジャボニカが混在していた痕跡が認められたことになる。

今回の分析では、28サンプルのうち温帯ジャボニカと思われるものが2サンプル、熱帯ジャボニカと思われるものが2サンプルあったことになる。またサンプル20は雑種であった。今回はサンプルの多くが複数粒の混成になっており、2つのジャボニカの割合を正確に推定することはできないが、混成サンプルのバンドが中の1粒だけの産物であるという仮定を置くと、28サンプル中、DNAが抽出できたサンプルは5（抽出率17.9%）、うち熱帯ジャボニカの割合は40%（2/5）であったと推定できる。

日本のイネ品種について

① 繩文時代から弥生時代のイネと稲作について

弥生時代の稲品種についての研究は佐藤俊也氏による膨大な研究（『日本の古代米』、佐藤1971）を別とすればまとまつたものがない。ときに、発掘報告書などにインディカの記載が散見されることがあるが、筆者が知る限りそれらは、穂や玄米の形がやや細長いことだけを根拠としたものであり報告者の無知または誤解によるものでしかない。というのも、稲の穂型はインディカ、ジャボニカを区別するには不適当なマーカでしかなく（佐藤、1991）、穂型によるインディカ、ジャボニカの誤判定率は40%にも達するからである。それにも関わらずわが国では長く、ジャボニカ＝短粒種、インディカ＝長粒種という「俗説」が通用してきたのは不幸と

いうより他ない。

ジャボニカ種の中には、主に陸稲地域で栽培される熱帯ジャボニカの種類があり、これらは水稲である温帯ジャボニカに比べて細長い粒をもつ。もし日本の考古遺跡から出土する米粒中に長粒に属する（たとえば初でいうと長／幅比が2.0を越えるようなもの）ものがあれば、それは熱帯ジャボニカである可能性が高い。最近のプラントオパールの分析結果によれば、イネは縄文時代の中期には日本に渡来していたと考えられる（外山, 1999）。ただし縄文時代には、その晩期後半の一時期を別とすれば水田遺構ではなく、縄文時代に稻作があったとすれば水田稻作以外の稻作、たとえば焼畑稻作のような稻作のスタイルを考えるのが自然である。焼畑の稻作の類例は、東南アジア山岳部などに今でも認められる。焼畑は基本的には栽培と休耕を繰り返す一種の循環農法であり、ある場所の耕作期間は休耕期間の数分の1から10分の1程度である。開墾は火入れによるのが普通で、これによって植物が固定した窒素を利用可能な形に変えるほか、害虫、雑草などを駆除することができる。しかし2、3年の耕作によって地力が低下した雑草などが戻ってくると、その土地は再度休耕される。

日本の縄文時代にもこうした焼畑による稻作があったと考えるのがよいであろう。ただし開墾され畑に開かれた土地は必ずしも山の斜面とは限らず、むしろ中小河川の後背湿地のような湿潤環境が好まれたかもしれない。この場合、適応するイネ品種は熱帯ジャボニカであり水田に広く栽培される温帯ジャボニカはまともな収量をあげることさえ容易ではない。こうしたことを考えると縄文時代にあったイネは熱帯ジャボニカに属するものと考えるのが妥当である。

弥生時代に入ると列島各地には各地から水田址や遺物としてのイネ種子、プラントオパールなどが検出される。しかし多くの遺跡、遺構からは高い頻度で熱帯ジャボニカが検出され（佐藤, 1999）、「縄文稻作」が弥生時代にまでその影響を残していたとも考えられる。つまり弥生時代の急速な稻作の広まりの背景に、縄文文化の積極的な関与を認めざるを得ないというのが稻を通してみた時代変遷像であることを指摘しておきたい。

②古墳時代以降のイネと稻作

熱帯ジャボニカのイネは古墳時代以降も残存する（佐藤, 1999）。それは近世にはいっても温帯ジャボニカと混在する形で栽培されていた（佐藤, 2000）。また日本各地の在来品種（近代育種の手によらず育成され、近世末から昭和初期頃まで栽培されていた土地に固有の古い品種）の中にも、熱帯ジャボニカやそれに固有の遺伝子をもつ品種が低頻度ながら栽培されていた。熱帯ジャボニカがこの2000年の間に漸減したのであろう。しかし熱帯ジャボニカの減少が徐々に起きたものか、それとも何かの画期を迎えるごとに急減したのか、詳細は明らかではない。また、地域ごとの頻度なども詳しくは判っていない。

こういう観点からすると、日本列島各地の各時代における出土炭化米の包括的な調査がぜひとも必要である。残念なことにDNA分析の歴史はまだ浅い上にこうした観点からの詳細な調査は行われておらず、上の疑問に明確な答えを与えることはできていない。今回の一ノ坪遺跡の炭化米は、時期については古墳時代後期という出土炭化米の発掘事例が必ずしも多くない時期の、かつややもすれば発掘点数の少ない東北地方での事例ということでその結果が注目された。

その結果は上に示したとおり、熱帯ジャボニカが40%という高率で出現しており、この結果をみる限りでは古墳時代末から古代初頭にかけての東北地方には相当量の熱帯ジャボニカが残存していたと考えることに大きな矛盾はなさそうである（表2）。

文献

- D'Andrea, Crawford, G. W., Yoshiaki, M. and Kudo, T. (1995) Late Jomon cultigen in northeastern Japan, *Antiquity* 69 : 146-152
藤原宏志・佐藤洋一郎・甲斐玉治明・宇田津徹朗 (1990) プラント・オパール分析(形状解説法)によるイネ系統の歴史的変遷に関する研究、*考古学報誌* 75 : 93-102

佐藤敏也 (1971) 「日本の古代米」、雄山閣。

佐藤洋一郎 (2000) 川田条里遺跡出土のイネ遺体の分析結果とその位置付けについて、長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書47、「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10」 - 長野市内 その8 - 川田条里遺跡道路第3分野 (自然科学・能編), 165-169.

佐藤洋一郎 (1999) 古代米の栽培特性(1)-2つの*japonica*の混在 - 日本国立科学財团会議室第16回大会研究要旨集, P8-9.

佐藤洋一郎 (1997) 静岡市・曲金北遺跡水田遺構の土壤分析結果、「曲金北遺跡(遺物・遺構編)」, p.257-266. (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所所長。

佐藤洋一郎 (1997) アジア栽培イネのインド型-日本型品種群における稈形の差異、*育種学雑誌* 41 : 121-134.

外山秀一 (1996) 歴史九精: 2-7.

表1 一ノ坪遺跡出土炭化米の温帯ジャボニカ-熱帯ジャボニカの判定

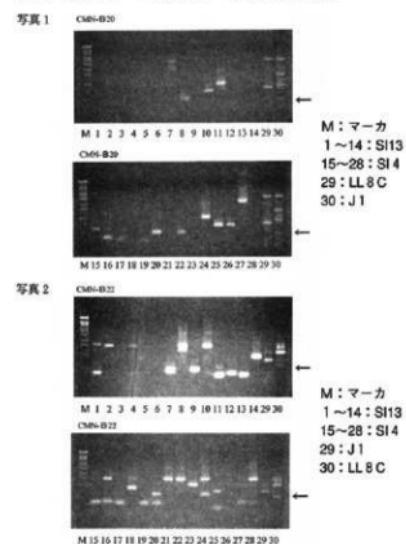
サンプルNo.	遺跡	遺物	枚数	判定	サンプルNo.	遺跡	枚数	判定
1	S14		1	?	15	S113	1	?
2	S14		1	?	16	S113	1	?
3	S14		1	?	17	S113	1	?
4	S14		1	?	18	S113	1	?
5	S14		1	?	19	S113	1	?
6	S14		1	?	20	S113	1	Tr,Tm*
7	S14		5	?	21	S113	5	?
8	S14		5	Tm*	22	S113	5	Tm
9	S14		5	?	23	S113	5	?
10	S14		5	?	24	S113	5	Tr
11	S14		2	Tr	25	S113	2	?
12	S14		2	?	26	S113	2	?
13	S14		3	?	27	S113	3	?
14	S14		3	?	28	S113	3	?

*Tr: 温帯ジャボニカ、Tm: 热帯ジャボニカ、TmとTrの縁側

表2 各遺跡から出土した良化米の熱帯*japonica*-温帯*japonica*の判定

遺跡	遺物	時代	遺物				写真1
			数量	子粒	胚乳	合計	
三内丸山(青森県青森市)	臼歯	平安～鎌倉時代	1	25.0	3	0	
高須城(岩手県盛岡市)	一	弥生時代	1	23.3	2	0	
一ノ坪(山形県山形市)	臼歯	古墳時代後期	2	40.0	2	1	
下仁田(栃木県宇都宮市)	一	弥生時代後期	13	25.9	3	46	
猪名平(長野県佐久市)	一	(中世)	2	25.0	0	0	
川田遺跡(滋賀県長浜市)	臼歯	江戸時代	1	16.7	5	0	
呂呂古(群馬県伊勢崎市)	米ぬか	弥生時代後期	1	20.0	0	4	
高原寺(奈良県高市郡高市町)	国内	弥生時代中期	2	14.3	2	9	
高畠(群馬県伊勢崎市)	臼歯	弥生時代後期	1	25.0	1	2	
御厨(群馬県伊勢崎市)	臼歯	弥生時代後期	1	10.0	0	9	
御厨(東京) (昭和区御厨町)	全穀粉	弥生時代後期	8	44.4	4	6	
下之瀬(鹿児島県山田町)	露頭	弥生時代	12	68.0	6	2	
芦戸下瀬(鹿児島県山田町)	臼歯	弥生時代後期	4	27.1	1	2	
芦戸下瀬(鹿児島県山田町)	臼歯	弥生時代後期	1	22.5	4	2	
鹿島(茨城県日立市)	夏實穀(中世)	0	8.0	1	5	6	
葛木遺跡(茨城県日立市)	一	弥生時代	2	33.3	0	6	
佐吉谷(茨城県日立市)	臼歯	弥生～鉄器時代	1	23.3	0	2	
下今崎(茨城県日立市)	臼歯	弥生時代	1	23.3	0	2	
鹿河(茨城県日立市)	臼歯	弥生時代後期	2	11.1	0	16	
合計			59	79.3	20	112	295

※ 芽穂中の寄生菌あり



写 真 図 版

図版1 遺跡全景（航空写真）



1. 西地区全景（上が北）



2. 東地区全景（上が北）



1. 東地区北西側全景（上が北）



2. 東地区北東側全景（上が北）



1. S I 2 炭化材出土状況（南から）



2. S I 2 完掘状況（南から）



3. S I 2-P 3 セクション（東から）



4. S I 7 炭化材出土状況（南西から）



5. S I 7 完掘状況（南西から）



6. S I 147 炭化材出土状況（西から）



7. S I 3 掘り方（南から）



8. S I 3 竪遺物出土状況（南から）

図版4
遺構（竪穴住居跡）



1. S I 4 遺物出土状況（南から）



2. S I 4 貯藏穴遺物出土状況（南から）



3. S I 5 完掘状況（南から）



4. S I 5 罧遺物出土状況（南から）



5. S I 5 勾玉・臼玉出土状況（南から）



6. S I 6 完掘状況（南から）



7. S I 9 南西部遺物出土状況（南から）



8. S I 9 遺物出土状況 近景（南から）

図版5 遺構（竪穴住居跡）



1. S I 13遺物出土状況（南から）



2. S I 13竪遺物出土状況（南から）



3. S I 13-P 2 + 3 遺物出土状況（南から）



4. S I 22完掘状況（南から）



5. S I 23完掘状況（南から）



6. S I 23竪遺物出土状況（南から）



7. S I 24-46遺物出土状況（西から）



8. S I 24竪遺物出土状況（西から）